



# HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ロシア文芸評論の形成前夜 1
Author(s)	北垣, 信行; Kitagaki, Nobuyuki
Citation	スラヴ研究, 2, 31-82
Issue Date	1958
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/4931">https://hdl.handle.net/2115/4931</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	KJ00000112998.pdf



## Русская критика за 10 лет до Белинского (1)

Н. Китагаки

Несмотря на тесные отношения между реалистической критикой Белинского и критиками его предшественников, т.е. Кюхельбекера, Веневитинова, Надеждина и других, последние до сих пор не так глубоко изучались исследователями. Автор предпринял систематическое изучение русской критики за 10 лет до Белинского именно для того, чтоб заполнить эту пустоту прежних исследований.

В первой части настоящей статьи, которая печатается здесь, изложена литературная критика с 1820-го года по 1825-й год, т.е. по год восстания декабристов. Этот период характеризуется тем, что критика классицизма, царившая до того времени в русской литературе, постепенно уступала своё место новой критике романтизма, главными носителями которого являлись декабристы-поэты. А что касается характера романтической критики этого периода, то она отличается стремлением к созданию русской самобытной народной литературы.

Здесь, в первой части текста, изображены черты взглядов отдельных критиков на литературу; а вместе с тем здесь даётся и обзор столкновений мнений различных литературных школ.

## ロシア文芸評論の形成前夜 (1)

北垣信行

### 序 章

ロシア文芸批評史の起点をどこにおくかについては、文芸評論それ自体にたいする解釈、換言すれば、その概念規定や範囲の決定の如何によって、さまざまな意見があるはずである。たとえば、文芸批評の範囲を文芸にかんする論争のみに限るとすれば、ロシア文芸批評史の開幕を遠く、創作における理性尊重をとなえたロモノーソフやトレヂアコフスキーと感情の役割の重要さを主張したスマローコフとの論争のあった頃にさかのぼって求めなければなるまい。また、文芸評論に言語や表現形式にかんする理論的表現をもふくめるべきであるとすれば、ロモノーソフの三文体の分類規定や 19 世紀の 10 年代におこなわれたカラムジン派とシシコフ派との新旧文章語にかんする論争も、当然、この中に組みこまなければなるまい。さらに、文芸評論とは、単なる感覚や好みだけに頼る主観的感想の表白の程度に留まることなく、一定の原理をふまえた上での見解の表明でなければならぬとしても、ロモノーソフやトレヂアコフスキーはすでに、たとえ借物にすぎなかったとは云え、ボワローの原理を所論の底に横たえていたのである以上、発生 of 時期をこの頃として論じなければならぬだろう。さらにまた、文芸評論は、文学にその方向をさし示すことを必須条件とするとすれば、1813-15 年に Н. М. Муравьёв-Апостолが発表した

《書簡》の中で彼が当時の上流社会のガロマニヤ、とくにフランスのクラッシシズムにたいする跪拝的傾向に反対して、その他の国々の文学、なかんずくギリシャ、ローマの古典に学ぶことを唱道した事例などは、その条件をみたすものとして、文芸批評史から除外することはできないだろう。

これをロシア近代文芸批評史というふうに、もっと狭く枠をしぼったところで、問題は依然として、そのまま残る。或者は、その起点を、プーシキンの《ルスランとリュドミーラ》や《バフチサライの噴水》の出現が文壇に論争の渦をまきおこし、次いでそれが「原理的地盤に移された」とする19世紀20年代の初頭におくだろう。<sup>1)</sup> また、B. ポリヤンスキーのように、「ロシアの文芸批評は18世紀の中頃に発生した」としながらも、メルズリャコフを「現代的意味における最初の批評家」と見る向もある。<sup>2)</sup> また、中には「注目に値する最初の文芸批評の代表者」をH. A. ポレヴォイであるとする者もある。<sup>3)</sup>

が併し、どのような見解をもつにせよ、ロシアの文芸評論が高い水準に立つ独自性ある真の意味の近代文芸評論として成立したのはベリンスキー以後においてであるという一点において異存のある者はそれほど多くはあるまい。ロシア文学がリアリズムの段階に入って初めて真のロシア文学の相貌をしめしはじめたのに呼応するようにして、プーシキンとゴゴリの作品に基づいてリアリズムの理論を創造し、それによってロシア文学のその後の発展の路線を設定したのがほかならぬこのベリンスキーであった<sup>4)</sup> ことは、周知の事実である。ロシアの文芸批評は、ベリンスキーをまって初めて、本当の意味で作品にたいする指導権を掌握する。そして、その後も、チェルヌイシェーフスキー、ドブロリューボフらによって代表されるロシア近代文芸批評はロシア文学の発展の道をさし示すことをやめていない。Л. トルストイのような文豪でさえも、プーシキンにかんするベリンスキーの論文にたいする批評の中で、暗にベリンスキーによる影響をみとめているほどである。そして、B. ブールソフも指摘しているように、その後、トルストイの創作活動において指導的役割を演じたのはネクラソフとチェルヌイシェーフスキーであり、ネクラソフ、シチェドリエン、グレープ・ウスペンスキー、トゥルゲーネフ、オストロフスキー、ゴンチャロフらも、ベリンスキーやチェルヌイシェーフスキーやドブロリューボフの美学のつよい影響のもとにあったのである。<sup>5)</sup> また、ロシア近代文芸評論の一般的特質である著し

1) このように説いているのはV. Саводникである。真の意味の文芸批評はこの頃ロマンティズムをめぐって展開された新旧両派の活潑な論争をもって開始されたというのが彼の主張である。V. Саводник, «Очерки по истории русской литературы», I, стр. 382. なお、詳細については本稿の第1章参照。

2) «Литературная энциклопедия», V, стр. 633, 634.

3) П.Н. Полевоиの主張。これを父親にたいする身びいき的な評価として片づけるわけにはいかない。この断定にはそれ相応の根拠があるのである。П.Н. Полевои, «История русский словесности с древнейших времён до наших дней», II, стр. 193.

4) ベリンスキー自身, ««Москвляч子 Москвитянин» への回答」という論文の中で、このことを次のように明言している。「芸術のあたらしい見本と芸術にかんするあたらしい観念をはっきりと理解するためには…ほかならぬロシア文学におけるあたらしい見本が必要であった。そしてそのような見本を提供してくれたのがプーシキンであり、つぎにはゴゴリであった」АНС. В.Г. Белинский, Полное собрание сочинений, 1956 г. т. X, стр. 242.

5) См. Б. Бурсов, «Вопросы реализма в эстетике революционных демократов», 1953 г. стр. 16.

い傾向性が出てきたのも、ベリンスキーの活動の後期以後のことに属する。

私がこの論稿の表題に掲げた「ロシア文芸評論」とは、これらの批評家によって代表される独自性獲得以後の、云わゆる科学的なロシア文芸評論のことである。しかし、この表題もしめすとおり、私はここでこれらのロシアの代表的な批評家の所論について説こうとしているのではない。私が意図しているところを一言にして尽せば、ベリンスキーの登場直前のロシアの評壇がどのようなものであったかをしめそうというのである。

ベリンスキーの存在があまりにも大きいために、これまで彼以前の批評家の業績は、とかく、その影になって見うしなわれ勝ちであった。しかるに、如上の近代ロシア文芸評論は、云うまでもなく、ベリンスキーひとりの力であるような高い水準に達したのではない。ロシアには既に、彼の出現以前に、ロシア独自の民族文学を創造するための原理を樹立しようとした幾多の群小批評家があって、彼らが各自部分的にベリンスキーの飛躍的發展の土台を築いていたのである。従って、いかにベリンスキーの才能が大きかろうと、彼らの存在を抜きにしては、ベリンスキーの發展は望みうべくもなかった訳である。これら群小批評家の研究の意義は正にここにある。そして、私が、これまで割合閑却されて靄の中につつまれたままになっていた、1820 年前後から 35 年頃までのロシア文芸批評を系統的に探ってみようと企てた理由もここにあったわけである。

ところで、一般に、この時期は、ロシアの文芸批評史の中でも最も錯雑紛乱を呈した時期であるとされている。一方ではまだクラッシズムの批評家群が活動を続けており、他方にはロマンティシズムの批評家たちの輩出が見られ、また第三の群としては云わゆるアルハイストたちの活潑な動きも見受けられ、それらの群の中に早くもリアリズム理論の胎動も看取される。しかも、それらの批評家群の中にもさまざまな個性が見られるのみならず、一人々々の性格が固定しておらず、意識的無意識的にいろいろな条件の作用をうけて時によって違った発言をしている者も少なくない。そればかりではない。1825 年 12 月 14 日の事件と 30 年のフランスの 7 月革命は評壇に直接間接の影響をあたえて、その様相の複雑さを層一層ふかめている。A. ベストウージェフ、キューヘリベッケルの或いは一時的な、或いは生涯にわたる批評界からの離脱、ブルガーリン、グレーチ、センコーフスキー、ポゴーデン、シェヴィリョフらの、徐々な、もしくは急激な反動陣営への転向等、時代の激変による批評家たちの個々の変貌が一層問題を複雑化して、もつれた糸玉を解きほぐすことをますます困難ならしめている。にも拘らず、われわれはそこに基本的な動向を見さだめなければならない。そこに第一の困難が横たわっている。第二の困難は叙述の方法に関するものである。この錯雑した過程の中では、幾つもの現象の発生や運動の進行が同時におこなわれるようなことも珍しくない。そのため、叙述が不手際な場合には、個々の現象をただ雑然とばらまいたという印象をあたえるだけで、そこに一貫した動きを見てとることを不可能にする惧れがある。これが第二の困難である。そこで、本文に入る前に、時期々々によるそれら評壇の基本的動向の図式をあらかじめ与えておけば、それがこの錯綜した絵図全体の理解に幾分かでも役だつことになると思うので、つぎにそのことについて前もって簡単な説明を加えておくことにする。

便宜上、ここで扱っている時代を大別すれば、1820 年前後から 25 年までと、26 年から 30 年までと、31 年以降の三期ということになるだろう。これは、私がこの時代のロシ

ヤ評壇の推移に見られる段階的変化にもとづいて区分したものであるが、興味あることには、図らずもその変り目がロシアの内外の政治的事件の発生と一致している。つぎに、これら三つの時期を簡単な言葉で規定すれば、下の表に示すようなものになるのではないかと思う。

第一期——クラッシズムとロマンティズムとの争い。24, 25年のアルハイストたちとロマンティズムの流派との論争。

第二期——《モスクワ電信 Московский телеграф》と《モスクワ通報 Московский вестник》によって代表されるロマンティズムの勢力伸張。中頃からのプーシキン、デリヴィクのリアリズム理論の芽生え。

第三期——ナデージデンのリアリズム理論の形成。それとポレヴォイ、ベストウージェフ・マルリンスキーのロマンティズム理論の併存。(クラッシズムやロマンティズムという呼称については、たとえばプーシキンやカテーニンのように、西欧のそれらに対応するものとしてのロシアにおけるその種の流派の存在を疑っている者もいる<sup>1)</sup>けれども、それは勿論西欧の場合とはかなり趣を異にするとは云え、それに似た文学現象として事実観察されるし、またこの種の呼称を廃しては複雑な批評界の動きを鮮明に描き出すことが困難なので、ここでは一般におこなわれている方法に従うことにした。そのほか、アルハイスト архайст という呼称は、前期のシシコフ派、後期のカテーニン、キューヘリベッケルらを中心とする流れにたいして、ソヴェートになってから Ю. トウイニャーノフらがあたえたものであるらしく、このごろではこのフォーマリズ的な呼び名はあまり用いられなくなってきているようであるが、これも、他の流派と区別するための便宜から、敢て使用することにした)

勿論、この区分の仕方と規定の仕方には、便宜主義的な要素もふくまれている。たとえば、早くもキューヘリベッケルやヴェネヴィーチノフの1825年以前の評論にもリアリズム的要素が見られるし、またアルハイストの中にはバフチンのように1828年になっても論争を試みている者もいるが、これらはその時期の主要なモメントではないという考えから、表から除外されている。が併し、こういった細かい事実との相違を抜きにすれば、こ

1) プーシキンがこのような見解を述べたのは、1824年に自作の叙事詩《バフチサライの噴水》が出た直後に、その序文を書いてもらったヴァゼムスキーに当てた手紙の中においてである。彼はこう書いている。「……君の《会話》(序文の題名——筆者)はロシアのために書かれたというよりも、むしろヨーロッパのために書かれたものである」「《ヨーロッパ通報 Вестник Европы》の意見は意見と見ることはできないし、《善意者 Благонамеренный》に腹をたてることもできない。とすれば、どこにロマンティズム的叙事詩の敵がいるというのだ？ クラッシズムの大立物など、どこにいるのだ？」これらの言葉は、論争好きなヴァゼムスキーが序文にことよせてクラッシズムの批評家たちと渡りあうことを目論んだことを戒めて云ったものである。См. Пушкин. «Сочинения», под ред. С.А. Венгерова, т. II, стр. 209-211. 併し、これには、トマシェーフスキーも云うように、作者の《善意者》との論争に捲きこまれたくない」というプーシキン自身の気持が作用していたと考えられないこともない。また、カテーニンもこの分け方に反対して、「いつ頃からか、文学をクラッシズムの文学とロマンティズム的それとの二つに分けることが慣いになっているが、この区別はどんなはっきりした相違にも基づいていない、全く馬鹿げたものである」と云っている。併し、これら両派の対立を強調することも危険ではあるが、その存在を完全に否定することも妥当性を欠いているように思われる。

の時代のロシア文芸評論は、複雑な態様のままに、時には急激な、時には緩慢な変転をとげつつ、これら三つの段階を経過して、最後にベリンスキーのリアリズムの本流へと流れこんでいった、とするのが私の見解なのである。

## 第一章 新旧両派の論争

### 第一節 《ルスランとリュドミーラ》をめぐって

1820 年はロシアの文芸評論にとって単なる年代の変り目ではなかった。それは、プーシキンの最初の叙事詩《ルスランとリュドミーラ》が発表された年であり、この作品とロマンティズムの問題をめぐって、新旧両派の批評家の論争の幕が切っておとされた年である<sup>1)</sup>。批評は、雑誌に叙事詩の断片が掲載された頃から、ぼつぼつ現れだしてはいたが、全篇が単行本の形で刊行される<sup>2)</sup>や、叙事詩はたちまち批評家や読者の間に異常な反響をよび、俄然誌上に論争の渦を巻きおこしたのである。B. トマシェーフスキーが自著《プーシキン》の中でこれを評して、「《ルスランとリュドミーラ》の発表があたえた感銘は実に大きかった。ロシアの文芸作品がこれほどにジャーナリストの情熱を湧かしたことはめずらしい<sup>3)</sup>」と書いているが、これは決して誇張ではない。この論争の目撃者である A. ベストウージェフがこの年の 10 月 27 日に妹にあてて書き送った手紙の「当地ではプーシキンの叙事詩《ルスランとリュドミーラ》のために大変な論争——愚劣さに愚劣さを加えるような——が持ちあがっている、が、これも悪いことではない<sup>4)</sup>」という文言が、これが事実であることを雄弁に物語っている。

この論争の経緯については、あとで具体的に詳述するつもりであるが、この論義は確かに、ベストウージェフによって「愚劣さに愚劣さを加えるような」と軽蔑をこめて評しられる底のものには違いなかった。当時の評壇の水準から云って、評論の拠って立つべき原理の欠如はいたし方ないとしても、そこには鋭い感覚と云えるほどのものさえ皆目見出されなかった。また、そこではロマンティズムという用語こそ盛んに使われてはいたが、まだ、そのロマンティズムの何たるかが敵にも味方にもよくわかっていなかった。従って、今から見れば、ロマンティズムの作品の系列に属するかどうかさえ疑問視

1) ロシアの文壇でロマンティズムの問題が初めてとりあげられ、論議の的となったのはこの 1820 年であることを証言している者に П.Н. サクーリンがいる。彼はこう書いている。「なるほど、早くも 1813 年からわが国の雑誌界には何やらロマンティズムとかいうものや、ピロン Бирон とかバイロン Бейрон とかバイロン Байрон とかいう詩人にかんする曖昧な風評が忍びこんできてはいた。また《雑誌の精神 Дух журналов》には A. シュレーゲルの所論に反対した論文の反訳さえも載った。併し、わが国でロマンティズムの問題が熱烈な興味をよんだのはようやく、《ルスランとリュドミーラ》が世に出てからのことである」

2) この叙事詩はまず 1820 年の 3 月にその第一の歌が《ネワの観察者 Невский зритель》に掲載され、次いで 4 月に第三の歌が《祖国の子 Сын отечества》の 15 号、16 号に分載されたのち、6 月下旬に全篇が単行本として世に出た。

3) B. Томашевский, «Пушкин», книга первая, 1956, стр. 298. Белинский も次のような言葉でこの事実を裏書している。「プーシキンの最初の叙事詩《ルスランとリュドミーラ》がひき起した歓喜と憤慨には何ものをも比べることはできない。天才的な作品でも、この子供じみた、天才的なところなどいささかもない叙事詩が惹起したほどの大騒ぎをひきおこしたものは極めて少ない」

4) «Памяти декабристов. Сборник материалов», вып. I, 1926, стр. 20.

される<sup>1)</sup> この叙事詩が、ここではロマンティシズムの典型的な作品と見なされているのも不思議ではない。それどころか、クラッシシズムの評論家のみならず、あたらしい流派の人たちの目にも、センチメンタリズムとロマンティシズムの区別さえ定かではなかった。これは、ロシアのロマンティシズムがまず外国のロマンティシズムの作品の反訳から出発し、センチメンタリズムの延長として発達してきたという特殊事情によるものと考えられる。当時のロシアの詩壇にはまだ、ロマンティシズムの精神に徹した詩人は現れておらず、従って、ロマンティシズムの見本と目せられるほどの作品も出ていなかった。周知のように、ロシアのロマンティシズムの扉を開いたのはジウコーフスキーであるとされている。なるほど、彼はこれより10年も前にビュルガーの《レオノーラ》を改作した《リュドミラ Людмила》を発表して以来、西欧のロマンティシズムの作品を次々と反訳し、またバラードやエレジーの創作にも従事してきている。が、もともと生れながらのセンチメンタリストでありセンチメンタリズムによって養われてきた彼に、もとよりドイツ浪漫派の複雑な哲学的的美学的雰囲気など理解できるはずはなく、従って所詮典型的なロマンティシズムの詩人とはなりえなかった。そのような訳で、彼は反訳をするにしても、自分の性格にあわせて改作し、恐ろしいものはこれを柔らげ、激越な調子はこれをおだやかにし、情感的なものはこれを深めると云った操作を加えた。また、彼の精神構造は、周知のように、ロマンティシズムの重要な一面を構成する反逆精神ともおよそかけ離れていた。П. С. コーガンの、「彼の中ではセンチメンタリズムとロマンティシズムが結合しており、彼にとっておだやかな精神生活は周囲の現実にたいする直接の関係であると同時に、神秘的なものや永遠なるものの反映でもあった<sup>2)</sup>」という評言は、彼のこの非反逆的性格を巧妙に言い当てている。こうした関係は、アナクレオンの詩人でありエピキュリアンであった云わゆるネオクラッシシズムの詩人のバーテュシコフにも認めることができる。彼は1811年頃からシャトブリアンに心酔して浪漫主義に歩み寄り、詩風においてジウコーフスキーに接近したとは云え、サクーリンの言葉を借りれば、「そのことはバーテュシコフが今や本来の詩的相貌を失って来ているということの意味するのではな<sup>3)</sup>」かったのである。また、演劇の世界を見わたしても同様であって、「詩の響のよさや、場面の効果や……流行の多感とか夢想性といった特色で同時代人を魅了した<sup>4)</sup>」と云われるオーゼロフにしても、結局はクラッシシズムの理論と訣別したわけではなかったし、彼とともに当時の劇界の双壁と見られていたシャホフスコイも同様、ラシーヌ、ヴォルテールら旧来の権威を棄てて、1820年頃にはすでにシェクスピア、スコット、オツシアンらから主題を借用したロマン

1) たとえば、П. Н. サクーリンは「われわれは今では、無理な理屈でもこねない限り、《ルスランとリュドミラ》におけるロマンティシズム(しかもドイツ的な)などを云々することはできないだろう」と云い(См. «История русской литературы XIX века», под ред. Д. Н. Овсяннико-Куликовского, 1910, т. I, стр. 101.), ベリンスキーはもっと断定的に「……ロマンティシズムは……その中(プーシキンの叙事詩の中)にはやはり片鱗さえもない」とまで云いきっている。(См. «Сочинения Александра Пушкина. Статья шестая».)

2) П. С. Коган, «История русской литературы с древнейших времён до наших дней», 1930, стр. 48.

3) «История русской литературы XIX века», под ред. Овсяннико-Куликовского, т. I, стр. 93.

4) Там же, стр. 89.

ティシズムの戯曲を幾篇か書いているとは云え、結局、アルハイストとしての姿勢をくすすまでにはいたらなかった。更に、革命詩人のルイレーエフはまだドゥームイや叙事詩に手を初めていなかった<sup>1)</sup>し、後にロマンティシズムの代表的作家となった A. ベストウージェフも長篇小説を発表していなかった<sup>2)</sup> 頃のことである。ロシアのロマンティシズムの発足が、このようなものであり、ロマンティシズムの規定のための材料になる作品が与えられていなかった以上、その判断に誤謬や迷誤が入りこんでくるのは当然のことと云わねばなるまい。

このロマンティシズムにたいする当時の批評家の把握の仕方の一面性を立証するために、ここに幾つかの実例を引いてみれば、まず 1820 年に出た Н. И. グレーチの《ロシア文学教科書 Учебная книга российской словесности》の第三部の 304 頁には《ロマン的（当時一部の間にロマンティシズム的の意味に使われていた）叙事詩 романическая поэма》について述べた一節があって、そこには、「ロマン的叙事詩を支配しているのは、怪奇なもの、すなわち昔自然や宇宙におけるあらゆる不思議なものや異常なものの原因と考えられていた精霊や妖術者や仙女や巨人や侏儒らの協力である。詩人はこれらの力をかりて、読者の空想力に訴え、読者は中世の伝説を知っているところからその虚構が真実と体裁の限界をこえない限り、詩人にその虚構を利用することをゆるすのである」という解説がある。また、1820 年に断片が《祖国の子》に発表され、後まとめた形で公刊に附された Н. オストローポフの《古代文学新興文学辞典 Словарь древней и новой поэзии》には《ロマン的、またはロマンティシズム的》という項があって、「ロマン的叙事詩とは、恋愛、剛勇、敬神の混合体を形成し且怪奇な行動にもとづく或勇士的事件にかんするところの詩的物語のことである」とある。更に、А. Ф. ヴォエイコフはこれらの材料を《ルスラン》の規定に利用して、《祖国の子》の 34-37 号（1820 年 8 月—11 月の）所載の《アレクサンドル・プーシキンの作品、叙事詩ルスランとリュドミーラ論究 Разбор поэмы: Русслан и Людмила, сочинение Александра Пушкина》の中でこう論じている。「叙事詩《ルスランとリュドミーラ》はエピック的なものでもなし、叙事的なものでもなし、教訓的なものでもない。とすれば、これはいかなる叙事詩であろうか？ 勇士的叙事詩である。そこにはヴラヂーミルの勇士たちが描かれ、そして、それはロシアの昔話から取材されている。妖術的叙事詩である。なぜなら、そこには魔法使が出てくるから。滑稽な叙事詩である。それはつぎの多くの抜書によって立証される。（このあとに抜書が 18 もあげてある）こんにちではこの種の文学はロマンティシズム的文学 Романическая поэзия とよばれている」。

このような間違った解釈がおこなわれていたについては、それ相応の理由はあったのである。1800 年に А. И. ムシン-プーシキンによって《イーゴリ軍記 Слово о полку Иго́реве》が出版されるや、このふるい叙事詩はつぎつぎとセリャコフ（1803）、パーリツイ

1) ルイレーエフが最初のドゥーマを発表したのは 1821 年であり、叙事詩のジャンルに手をつけたのは 1823 年のことである。

2) А. ベストウージェフにはこの頃中短篇小説がある。併し、その中の出色の作《レヴェリ紀行 Поездка в Ревель》にしても、中篇小説というより、むしろラヂーシチェフの《ペテルブルクからモスクワへの旅》に類した旅行記であって、後年のマルリンスキーの俤はみとめられない。

ン (1808), ヤズヴィーツキー (1803), レヴィーツキー (1813) らによって研究され注釈が加えられることとなった。そこへ、この発見後間もなく、1804年にキルシャ・ダニーロフの叙事民謡集が出、その後1818年にはそれが再版された。ここにふるい詩の世界が人々の眼前に豁然として開けたわけである。これらの発見が研究家や詩人の研究心や創作欲を刺戟しないはずはない。果然、それは18世紀末からの古代中世にたいする関心の昂まりと相呼応し且対ナポレオン戦によって呼びさまされた民族意識に支えられて、ロシア史のふるい時代にかんする研究労作や歴史に取材した叙事詩や小説の続出をもたらした。A. H. ラヂーシチェフの《ポーヴァ Бова》(1797-1800), Н. М. ヘラスコフの《バハリヤナ Бахарияна》(1796-1801), Н. А. ラヂーシチェフの《詩による勇士の物語 Богатырские повести в стихах》(1801), カラムジンの《代官の妻マルファ Марфа Посадница》(1203), ジウコーフスキーの《ノーヴゴロドのヴァヂーム Вадим Новгородский》(1803), デルジャーヴィンとリヴォフの《ドブリニャ Добрыня》(1804), А. Х. ヴォストロコフの《ペヴィスラドとゾーラ Певислад и Зора》(1804), ジウコーフスキーの《勇士アリオージャ・ポポーヴィッチ Богатырь Алёша Попович》(1804), И. А. クルイロフの《勇士イリヤ Илья богатырь》(1806), ジウコーフスキーの《マリヤの林 Марьяна роца》(1808), В. Т. ナレーズヌイの《スラヴ夜話 Славенские вечера》(1809), М. Н. ムラヴィヨフの《オスコリド Оскольд》(1810), バーテュシコフの《プレドスラーヴァとドブリニャ Предслава и Добрыня》(1810), シシコフの《二人の人物 А と Б の文学談 Разговоры о словесности между двумя лицами Аз и Буки》(1811), プーシキンの《ポーヴァ》(1815), Н. アルツイバーシェフの《ログネダ, またはポロツクの壊滅 Рогнеда или разорение Полоцка》(1818) 等がそれである。

これにジウコーフスキーの1817年作の《12人の眠れる乙女 Двенадцать спящих дев》を加えれば、上記の批評家たちがロマンティシズムの概念規定に際して念頭に浮べていたものが何であったかは、凡そ見当がつくものと思われる。<sup>1)</sup> しかも、このジウコーフスキーの叙事詩のロマンティシズム的性格については疑いをさしはさむ余地はない<sup>2)</sup> のである。彼らの謬見のよって来たゆえんは自ずから明らかとなろう。

このロマンティシズムの定義とくらべると、《ルスラン》そのものにたいする批評はもっと滑稽であり、的外れである。後に、ベリンスキーはこの時のことを批評してこう書いている。「あたらしいものの擁護者たちはそれ(叙事詩)を大作と見て、その後も長いこと彼らはプーシキンをルスランとリュドミーラの歌い手という滑稽な称号で呼んでいた。もう一方の極端を代表する連中、つまり旧時代の盲目的崇拜者、尊敬すべき間抜けどもは《ルスランとリュドミーラ》の出現に侮辱をおぼえ、憤激した。彼らはそこに、すべてありもしないもの——無神論に近いもの——を見て、そこにまさしく存在するもの、即ちよい点、響

1) Б. Томашевскийは、筋の類似を基にして、《ルスラン》が、このジウコーフスキーの叙事詩を改作したものであるとの説をなした。А. Незелёновに反対して、その構想や語(い)の影響関係を認めながらも、両作者の作風の相違や、プーシキンの一歩先んじている点を強調している。См. Б. Томашевский, «Пушкин», книга первая, стр. 331-335.

2) この点については衆評の一致したところと思われるが、一例をあげれば、А. Н. Соколовは、この《12人の眠れる乙女》を「ロマンティシズム的叙事詩」と規定している。См. А. Н. Соколов, «Очерки по истории русской поэзии XVIII и первой половины XIX века», 1955, стр. 388.

たかい詩句、知性、美的感覚、諸所に見られる文学の閃きのようなものを何ひとつ見なかった……が、これは単に誹謗的な論文ばかりでなく、賞讃的な論文にもあてはまることである。しかし、この種の現象はわかりきったことであると同程度に自然なことであり平凡なことである。物の本質に徹する才能に恵まれていない人というものは、旧慣墨守の徒と皮相しか見えない輩とに分れる。前者はふるいものに肩をもって、古いものはすべて古いからよく、新しいものはすべて新しいから悪いとする賢明な原則にのっとり、後者は、新しいものは新しいからすべてよく、古いものは古いからすべて悪いという賢明な原則にのっとるものである<sup>1)</sup>。これが当時の批評家たちであった。このペリンスキーの評言がどの程度正鵠を射たものであるかは、つぎの新旧両派の論争の実状に接してみれば、自ずから明らかになるだろう。

先の註でも触れておいたように、叙事詩はまず三回にわたってその断片が雑誌に発表されたのであるが、早くも、ルスランと首との戦いの部分と首が息をひきとる直前の述懐の部分誌上に出たときから、批評家によって採りあげられるところとなった。その論文は5月30日の《ヨーロッパ通報 Вестник Европы》に載り、表題は《再批判 Ещё критика》、署名は《ブトゥイルスカヤ郷の住人 Житель Бутырской слободы》となっていた。この筆者は長いこと同誌の監修者のカチェノーフスキーであるとされていたが、最近では A. グラゴレーフであることが考証されている。<sup>2)</sup> 彼が論文の中で相手どっているのは、《ルスラン》の作者ではなくて、あたらしい文学流派に属する詩人たち全体である。そして、攻撃の直接の対象も、この頃《祖国の子》にバラードを二篇発表した П. プレトニョフであった。筆者はまず、ジウコーフスキーや群小詩人たちがもたらしたバラードの流行を苦々しく思い、これに悪罵をあびせかけて、「わが国の詩壇を見たまえ。それは、頭蓋骨や骨や半ば壊れた棺桶や墓標が散在し、幽霊や幻や経帷子をまとった亡霊やそれをまとわぬ亡霊が徘徊し、大鴉の叫びや蛇のかさこそ立てる音や狼の吠声の聞えてくる墓場ではないか……」これがバラードにおいて好んで採りあげられた形象や主題にたいする嘲罵であることは云うまでもない。更に、彼は、ここでは実例は省くが、ヴァーゼムスキーのバラード《憂鬱 Уныние》やジウコーフスキーのバラード《男への慕情 Тоска по милому》から「低俗な」言葉や「洒落た」云いまわしを拾い出して、これを批判している。そして更に鋒先を、このころ民話が詩の世界へ侵入して来ている事実転じて「滑稽というよりもむしろ憐れな片言の反復などに、どんなよいものが期待できよう?……わが国の詩人たちがキルシャ・ダニーロフをもじりはじめたところで、何が期待できよう?」と書き、次いでプーシキンの叙事詩に言及して、「一番価値のある場面とはこういう箇所なのだ。戦場でルスランは背軍にたち向って、剣を投げだしている勇士の首に出遇う。首は彼と押問答の末戦いをまじえる……わたくしははっきり覚えているが、こんなことは皆自分の保母から聞いたことだ。それなのに、今どきこの年になって現代の詩人からもう一度おなじことを聞かされようとは!……」批評家はこのように、この叙事詩をお伽話とおなじ位置におくことによって読者にその下らなさを感じかせようとした揚句、最後に、盲評の見本とし

1) Белинский, «Сочинения Александра Пушкина», статья шестая.

2) См. Б. Томашевский, «Пушкин», книга первая, стр. 340.



革命までもたらしかねないことをほのめかして、「フランスでこの種の作品が横行しはじめた時は、文学のみならず道徳の頹廢すら生じた」と書き、最後をつぎのような教訓で結んでいる。「文学の目的はわれわれの精神の昂揚であり、清純な喜びである。情慾の場面は粗野な感情を捉えるだけだ。その種の場面は神々の言葉に値しない。神々の言葉はわれわれに美德の大いなる業を教え、不遇の身にも英雄的精神を、祖国愛を喚起し、清浄な愉楽の描写で魅了すべきものである。文学の対象は美なるものである。」

これら以外に、叙事詩を非難した論文としては、これより先8月から9月にかけてヴォエイコフが《祖国の子》に、作者に同情的な擬態を示しながら叙事詩をくさした長大な論文《アレクサンドル・プーシキンの作品、叙事詩ルスランとリュドミーラ論究》を発表しており、またその9月には同誌に彼にあてた、《某々》という署名のついた《叙事詩《ルスランとリュドミーラ》評の筆者への書簡 Письмо к сочинителю критики на поэму «Руслан и Людмила》》が収載されている。この書簡は、先の論文でグラゴレーフがカチェノーフスキーと誤認されていたのと同様、カテーニンの手になったものと誤り伝えられていたのであるが、今日では、カテーニンの回想録から、それが彼と傾向をおなじうするД. П. Зойкоフのものであったことが明らかとなっている。この男もこの作品が従来のクラッシシズム的叙事詩の構成法や筋の運び方にのっとっていない点を攻撃して、「なぜフィンはルスランが現れるのを待ちうけていたのか？なぜルスランには口笛をふく癖があるのか？」「なぜ大きな顎ひげを垂らした侏儒がリュドミーラのもとにやって来たのか？」などと、滑稽な問いを發している。

こうしてこの新傾向の作品にたいする非難攻撃が全文壇を掩い、まさに旧陣營の側が勝利を占めるかに見えた、ちょうどその時に当って、これに鋭い反撃をこころみようとした者が立現れた。それはアレクセイ・ペローフスキーである。表題は《叙事詩《ルスランとリュドミーラ》評の筆者への書簡にたいする意見 Замечание на письмо к сочинителю критики на поэму «Руслан и Людмила》》というのであって、署名は《グリゴリー・Б...в》となっていた。その狙いは、皮肉をまじえたウィットで敵の「訊問」が的外れで滑稽であることを感づかせようというところにあった。その調子は、愚直で一本調子な相手とは打って違って、物柔らかかではあるが、それでいて何やら鋭いものを蔵していた。彼は「この詩人こそ憐れだ！B氏の大打撃から立ちなおる暇もあらせず、某々氏が一背負いもある、ますますもって面倒な質問を携えて立ち現れたのだから！両氏の間には恐らく学問的な手紙のやりとりが始まり、あなた方の雑誌はこの *assaut d'esprit* (智慧競べ) の場となることだろう！取りあえずお祝い申しあげよう！某々氏の質問とB氏の回答からはロシア文学に素晴らしい光が射してくることだろうから！」と相手を皮肉り、告発状の語調にも似た相手の問いにたいしては「人によっては、叙事詩のこととは取らずに刑法上の犯罪のことと取る者もいるかも知れない」と揶揄し、追放の身である作者を攻撃する醜さを論じて「われわれは作者自身が現在ペテルブルクにいないことが残念でならなかった」とも書いている。そして最後に、主人公の行動の動機という動機を全部明示せよとの要求は、クラッシシズムの作品とはちがうこの種の叙事詩には適用さるべきではないと説いて、「なぜルスランは出発の時に口笛を吹くのか？」という問いには、「悪い癖なのです、某々氏！それだけのことです。お伽話を、それも滑稽なお伽話を読んでいるということをどうぞお

忘れなく、いったいどうしてルスランが口笛をふいてはならないのですか？」と反問している。

ただ、ここに注目すべき一群の人たちがいた。彼らはロマンティズムの旗のもとに集った人たちではない。にも拘わらず、この叙事詩にたいして好意ある態度を示している。それはクルイロフであり、シャホフスコイであり、バフチンであり、最後にキューヘリベッケルであった。つまり、後にアルハイストとして分類された人たちである。アルハイストについてはあとで纏めて詳述するつもりであるが、これを一言にして規定するならば、当代流行の外国文学の奴隸的模倣を排して、文体の構成に古語、すなわち教会スラヴ語と古代ロシア語の語(い)を利用し同時に民衆の言葉を取り入れることによって独自の民族文学を樹立することを考えていた一群の詩人たちのことである。彼らは、等しくロマンティズムの陣営と相争ったという表面的な現象から、ひさしくクラッシズムの詩人群の中に入れられていたのであるが、文学史の上から見れば、あたらしいジャンルや文体の創造を目ざして、後のリアリズムの道を切りひらく仕事の一斑を受けもち、且政治的にはデカブリズムと大なり小なり関係を有するという点でクラッシズムと異なる点が多いという理由から区別の必要が生じて、あらたに類別されたものである。とは云え、彼らは別に一つの流派を形成していたのではない。従って、時により同一の歩調をとっていない場合も珍しくない。この場合にも、たとえば、おなじアルハイストでも、前出のズイコフやカターニンはこの作品にたいして好感を持っていなかった。

ところが、前記のクルイロフ以下の人たちはこれとは違った態度に出たのである。まずクルイロフは《ルスラン》のクラッシズムからの悪評にたいして有名なエピグラムをもって応じた。また、1818年まではプーシキンと敵対関係にあったシャホフスコイが1824年には叙事詩中の挿話を脚色して舞台にのせている。更に、これはだいたい後のことに属するが、20年代の末にはバフチンがこの叙事詩をプーシキンの最良の作品と褒めたたえて、「プーシキンがこの種の、真に民族的な作品の創作に従事してロシアのアリオストの名をほしいままにすることを望まなかったのは惜しい<sup>4)</sup>」と書いており、そのほか、キューヘリベッケルも、批評史とはなんの関係もないことではあるが、1843年の日記にこう書きこんである。「内容は、云うまでもなく、下らないし、作品は詰らなくて深みなど全くない。ただ文体だけがルスランの価値を成している。そのかわり文体たるやまことに素晴らしい。わたくしの意見では、もっとも優れていると思われるのは第六の歌である。その中の戦いの箇所はポルタワなどより比較にならぬほどよい」「わたくしは、《コーカサスの捕虜》や特に《バフチサライの噴水》は、たとえその中に時おり絶妙な詩句も見出せるとしても、ルスランの足もとにも及ばないという見解を固持するものである」。

ところで、面白いことには、このようにアルハイストの中にプーシキンに同情的な見解が見出された原因は、却ってプーシキンの側にあったのである。アンネンコフの伝える有名なエピソードによれば、「プーシキンは1818年にカターニンのもとにぶらりとやって来て、相手に蘆杖を差出して、「わたしはディオゲネスがアンティステネスのところへや

1) プーシキンは《ルスラン》を書くにあたってアリオストに学んだことを自から口外している。この叙事詩以後、彼はこの時のスタイルを棄てている。

って来たように、あなたのところへやって来ました。これで叩いてくれたまえ——但し教えてもらいたいのです」と云ったところ、《オリガ Ольга》の作者は「学ある者を教えるということは台なしにしてしまうことです」と答えた」という。このことがあったのは、時あたかもプーシキンにとって《ルスラン》の執筆の最中である。ジウコーフスキーが継承し発展させた云わゆるカラムジンの「滑らかな文体」は軽快詩や軽い民話にこそ適するが、<sup>エゴス</sup>史詩には適しない。《ルスラン》の題材はむしろ民話のジャンルに属すべきものなのであるが、大きな叙事詩に取りかかるに当って、カラムジンの文体に嫌らなかったプーシキンは、これから脱け出て一歩前進し、あたらしいスタイルを創造しようと企てたのである。この時、その文体の創造においてカテーニンは決定的な役割を演じている。というのは、彼はジウコーフスキーのバラードにたいする反対見本として示した自己の「ロシア的バラード」において、既に庶民の言葉の導入に成功していて、これにプーシキンが追随したからである。端的に云って、《ルスラン》の文体は、作者自身の独創性を抜きにして考えれば、カラムジンの文体に古語と俗語とを混じたものであった。ヴォエイコフが前記の論文の中で、очи<sup>きたこ</sup>（眼）という古語に жмуриться（閉じられる）という俗語の動詞はふさわしくないと云って作者を非難したのも、正にこの特異な文体についてである。そして、既に寓意詩の中に俗語や俗語的<sup>俗語的</sup>云いまわしを導入していたクルイロフが《ルスラン》の肩を持った理由も、更にまたアルハイストのバフチンやキューヘリベッケルが叙事詩の文体を賞讃した理由も、ここにあったわけである。

しかし、何れにしても、このような訳で、このころロシア文学はまだ文体の創造にのみ忙しく、従って、批評もまたその枠内にとどまって、理論の創造へと歩みだすどころではなく、その水準も、以上に見るごとく、高いなどとは到底云えたものではなかった。「退屈まぎれに 1820 年の雑誌でも繰ってみたまえ——諸君にはそれが 24 年ほど前に書かれたり読まれたりしたものとはとても信じられないだろう」<sup>1)</sup> とは、ベリンスキーが後にプーシキンにかんする論文の中でこの頃の文芸批評にふれた折に、その後の評論の長足の進歩の跡と引較べて述懐した言葉である。が併し、ロシアの文芸批評は高度の発達をとげるのにそれだけの年月さえも必要とはしなかった。それは、後章で扱う任意の批評家の論文の一つでもとりあげて比較してみれば直ちに知れるところである。

## 第二節 《コーカサスの捕虜》とヴァーゼムスキー

1822 年に出たプーシキンの第二の叙事詩《コーカサスの捕虜》は最初の叙事詩ほど不評でもなかったし、轟々たる論争もひき起さなかった。数おおい論文の中には、作品全体については賞讃しながらも、筋の構成や主人公の性格の描写についてセンチメンタリズムの観点から批判している（プレトニョフ、ヴォエイコフらのように）者もいた<sup>2)</sup>し、チェルケスの乙女が牢から男を逃がしたあと、川に何が起ったのか納得がいけないと云ったような滑稽な非難の声も聞かれた<sup>3)</sup>が、新作の価値を否定した者は一人もなく、ベリンスキ

1) Белинский «Сочинения Александра Пушкина», статья шестая.

2) См. Б. Томашевский, «Пушкин», книга первая, стр. 412-416.

3) См. В. Белинский, «Сочинения Александра Пушкина», статья шестая.

そこには次のような文章がある。「1823 年の《ヨーロッパ通報》にさえ、この叙事詩を褒め

一の表現を借りれば、「どこへ行っても讃歌しか聞かれなかった」<sup>1)</sup>のである。そして、この度は、旧派の批評家の評論よりも新流派に属する批評家の評論のほうが優勢と見えた。

当時雑誌を賑わした批評には、グレーチ、A. イズマイロフ、プレトニョフ、ヴォエイコフ、ヴァーゼムスキー、ポゴーチンらのものがあるけれども、それらに深く立ち入ることは、もはや論文全体の構成の上から見て無意味な業と思われるので、ここでは、ロマンティシズムの文芸理論乃至ロシア文芸批評史全体から見て重要と思われるヴァーゼムスキーの評論に耳をかたむけるだけに留めよう。

この旧アルザマス会員はこの論文では、ロマンティシズムの熱心な宣伝家として登場して、ロシア文学に根本的な転換を要求している。彼は新流派に献身的に帰依するの余り、これまでのロシア文学をすべて否定し去って、こう断定している。「われわれは詩人の名には恵まれているが、作品にかけては乏しい。」<sup>2)</sup>「これまでに、われわれの言葉に何らかの形象を与えることだけにでも成功した立派な作家はあまりいない。しかも、わが国の文学の形象はまだ現れず、皮を突きやぶって出て来ていない。たとえ一歩ゆずってそれを認めるとしても、それは希望をふくめての話である。ロシアには言葉はあるが、力づくで遅しい民族の表現に値する文学はまだないのだ!」<sup>3)</sup>

この頃は、ヴァーゼムスキーはワルシャワに駐在してポーランドの反政府分子と交わってポーランドのシンパの罪を問われて職を解かれた後、秘密結社にこそ加わってはいなかったが、デカブリストたちに接近していた頃で、従って思想的にもっとも尖鋭化していた頃にあたる。その急進的な思想は、この論文の中でも、検閲をおもんばかって、かなり控えめではあるが、つぎのような、文学のみならず一切の革新を待ちのぞむ気分として表明されている。「あらゆる人間的なもの同様、文学も変革を蒙りつつある。たとえそれがわれわれの多くの者には気に入らないことであろうとも、これを否定しることは不可能だし、また馬鹿げたことなのだ。かくして、今やその種の改造の時期がやって来たようである。」<sup>4)</sup>

---

たたえた批評がのった。その批評は、筆者が四苦八苦したにも拘わらず、チェルケスの女がどうなったのか、これらの素晴らしい詩句が何を意味するのか、皆目見当がつかなかったということで特に注目に値するものであり、且当時有名なものであった。

俄かに波がにぶい音をたて、  
遠くに呻き声がきこえた……  
灰色の岸にのぼって  
うしろを見れば……兩岸はあかるく、  
飛沫をうけて白く見える。  
が、わかきチェルケスの乙女はいない、  
岸べにも山のふもとにも……  
ものみな死せるがごとく……寝入れる岸に  
聞えるはそよ風の音ばかり。  
月明りのもと揺れる水のものに  
波紋は消えてゆく。」

1) Там же.

2) «Сын отечества», 1822 г., ч. 82, No. 49, стр. 116.

3) Там же, стр. 280.

4) Там же, стр. 117.

「われわれに必要なのは試みであり、敢行することである。われわれにとって危険なのは喪失ではなくて、停滞である。」<sup>1)</sup> そして彼は、文学における革新は来るべきロマンティズムに求められると見て、その勝利を確信してこう云う。「われわれが現代のもっとも優れた詩人たちに負っている上記の作品(《コーカサスの捕虜》とジウコーフスキー訳の《シヨンの虜囚》)は更にもう一つのことを、われわれの間でロマンティズム的叙事詩が成功を収めているということを示している。」<sup>2)</sup>

ところで、トマシェーフスキーも指摘しているように、ヴァーゼムスキーがこのようにロマンティズムのために戦いながら、依然としてその戦いが「アルザマスの戦いからの直接の継続」であると考えていた<sup>3)</sup>ことは、つぎのような言葉から窺える。彼はこう書いている。「わが国のロマンティズム文学の敵どもが特に集中的打撃を与えようとしているのは、云わゆる流行語とか新語とかいう言葉にたいしてである。даль(遠方)とか、таинственная даль(神秘的な遠方)とか、туманная даль(霞める遠方)とかいう言葉が他の表現以上に彼らの憤激を買っているのだ。それは嘗て、слово милое(心地よい言葉)が或人々によって拒否の烙印をおされたのと同様である。それにしても、言葉づかいだけに云いがかりをつけることが過去現在将来を通じて常に愛用の武器であり、作品の下らなさを秤る正確無比な秤の錘だということを、これらすべての心地よくない(немилые)遠方でない(недальние)文学者たちはいつになったら保証できることやら?」<sup>4)</sup>

このように、新旧両派何れを問わず、当時のロシアの文学者たちにはまだロマンティズムとはカラムジニズムが発展したものであると考えている者が多かったのである。しかし、ヴァーゼムスキーのロマンティズムにたいする理解のしかたはこのように一知半解であったにも拘らず、彼が叙事詩の主人公の性格を分析するに当って、これを当代の社会現象と関連づけて考察した次の言葉は注目に値する。「今日の社会状態ではこの種の人物はしばしば観察者の目にとまっている。功名心に燃えているために、節度のある云わゆる思慮分別の希望にのみ寛大な外的生活に譲歩するようなことでは満足はいかない内的生活の、力の過剰。この種の軋轢の必然的結果。目標のない、心の激動。肝腎なことに用いることのできない、飽くことを知らぬ活動。決して遂げられることなく、絶えずあらたな志向をもって生起する希望——こういったものが、Child-Harold やコーカサスの捕虜やこの種の人間の性格を表示するところの、倦怠とか、あくどさとか、飽和感とかいうものの芟除しがたい芽を、どうしても心内に育むことになるのである。」<sup>5)</sup> ヴァーゼムスキーはこの作品の主人公に早くも、後に余計者のタイプとして規定されるころの社会的タイプを、特にペチョーリン的余計者のタイプを発見しているのである。

### 第三節 《バフチサライの噴水》とヴァーゼムスキー

1823 年はロマンティズムの批評陣にとっては攻勢開始の年であって、この年の批評界

1) Там же, стр. 119.

2) Там же, стр. 116-117.

3) См. Б. Томашевский, «Пушкин», кн. I, стр. 418.

4) «Сын отечества», 1822 г., ч. 82, No. 49, стр. 117, сноска.

5) Там же, стр. 121-122.

の動向については、アリマナッフ《北極星 Полярная звезда》の発刊や、それに伴う A. ベストウージェフの活躍や、オレスト・ソモフの《ロマンティシズム文学論 О романтической поэзии》の発表等、記述せねばならぬことは多いのであるが、この章の叙述の統一のためにそれらを次章にゆずって、この第三節では先まわりして 1824 年の《パフチ サライの噴水》の出版を契機とする評壇の論争について述べておこうと思う。

さて、このプーシキンの叙事詩の巻頭を飾った無署名の序文がはしなくも、一時下火になったかに見えたクラッシシズム、ロマンティシズム両派間の論争を俄かに再燃させる役割を演ずるのである。これに火をつけたのはヴァーゼムスキーであった。彼は、ありふれた序文を依頼して来た作者の意にそむいて、この機会をとらえて、ロマンティシズムをめぐって旧派の評論家たちを相手に論争を開始しようと思論だったのである。《発行者とヴィボルク地方、すなわちヴァシーリエフスキー島の古典主義者との会話 Разговор между издателем и классиком с Выборгской стороны, или с Васильевского острова》という題名がその意図をはっきりと物語っている。というのは、その会話の相手の古典主義者が実在の人物であったからである。トマシェーフスキーを信ずるとすれば、その相手というのは H. A. ツェルターレフのことである。<sup>1)</sup> この《ヴァシーリエフスキー島の住人》は《善意者》誌上で初めはジウコーフスキー派の「新流派」を、後にはロシア文学愛好者自由協会の左翼の詩人たち、主としてデリヴィク、バラトウインスキー、キューヘリベッケルを、更に 1823 年には《文学の新流派 Новая школа словесности》という論文の中で「ロマンティシズムの人たち」を、特に、指名は差控えていたとは云え、プーシキンを攻撃したというから、ヴァーゼムスキーのこの度の序文は挑戦状であると同時に、それらの攻撃にたいする回答であったとも取れる。<sup>2)</sup>

この序文は対話の形式で構成されていて、クラッシシズムの批評家がロマンティシズムに間違った解釈を下して難癖をつける毎に、発行者が相手の謬見をくつがえすという仕組みになっている。が、かと云って、筆者の代弁者である発行者の吐露する見解もまた必ずしも当たっているとは云い難い。それどころか、多くの誤謬に満ちてさえいる。たとえば、彼は 18 世紀以来のロシア文学の発展を専らドイツ文学の影響下におこなわれて来たと見ている。この頃既にロシアヘスタール夫人の《ドイツ論》が入っていて、ロシアでは、夫人がこの書物によってフランス人にドイツ文学、特に当代のシュレーゲル兄弟らドイツの批評家たちのロマンティシズムの理論を紹介したという事実から、ロマンティシズムはフランスのクラッシシズムに対抗してドイツに発生したとする考え方がひろく行われていた。ヴァーゼムスキーはこの考え方を受け入れているだけでなく、更に、ドイツを発生地とするロマンティシズムの正当化を強調するの余り、ドイツ文学の影響を普遍化して、ロシアのロマンティシズムの詩人たちは、等しくその時代のドイツ文化の影響をうけたロモノソフやカラムジンの例にならったのだと主張している。これが論文中もっとも弱点とすべき箇所である。それ以外に、先の註でも触れておいたように、ロシアの新旧両派の対立を

1) Брокгауз-Ефрон の Энциклопедический словарьによれば、この筆名は O. ソモフのものとされている。一方、トマシェーフスキーは別に《ガレルナヤ港の住人》というペンネームをソモフに帰属させている。

2) 詳しい事情については、B. Томашевский, «Пушкин», стр. 515-516 参照。

あたかも西欧のクラッシシズムとロマンティシズムの対立とおなじものとして取扱っている点なども前記の如く(34頁注1参照)プーシキンによって誤謬として指摘され、非難されたところである。端的に云いかえれば、プーシキンの意見は、フランスのクラッシシズムのようなものはロシアにはなかった、従って西欧にのみ適用さるべき尺度をロシアにあてはめた《会話》それ自体捏造の産物でしかない、ということになるかと思う。

併しながら、これらの会話に見られる内容の不備は当時の文壇にたいする《会話》の影響力とは無関係であった。この序文が、H. レールネルの言葉を借りれば、「ほとんど当の叙事詩以上の物議を醸した」<sup>1)</sup>のである。そればかりではない。《善意者》の批評家はヴァーゼムスキーの挑戦に応じなかったが、代りに《ヨーロッパ通報》の執筆者がそれを受けて立ったのであった。回答の論文は《古典主義者と《バフチサライの噴水》の発行者との二度めの会話 Второй разговор между классиком и Издателем Бахчисарайского фонтана》という題名で、署名は某となっていた。こうしてこの《二度めの会話》が長期にわたる論争の出発点となるわけである。ヴァーゼムスキーは論文の筆者をカチェノーフスキーと思いがいして、彼あてに回答を書いて《婦人雑誌 Дамский журнал》に載せ、その中で自分も名乗りをあげて相手にも名をあかすように要求した。が、間もなく、相手が有名な寓話詩人の И. И. ドミートリエフの甥の М. А. ドミートリエフであったことがわかると、彼は更に М. ドミートリエフあてにふたたび回答を書いて、それを同誌の次号に発表した。こうしてなおもあと 1, 2 度両者の間に応酬があり、プーシキンまでがこれに捲きこまれてヴァーゼムスキーのために筆をとるなどのこともあって、最後にドミートリエフの《二度めの会話の批判にたいする反論 Возражения на разбор Второго разговора》をもって論戦は終りをつげた。併し、この争いは、たがいに多弁を弄した割に成果がすくなく、単なる泥試合におわり、ヴァーゼムスキーは敵をふやし、ドミートリエフは《ヨーロッパ通報》の編集部内で重きを加えただけに留った。もっとも、ドミートリエフの方も無傷というわけにはいかなかった。その翌年にヴァーゼムスキーの味方である А. А. ベストウージェフによって、《1824 年間及び 1825 年初頭のロシア文学にたいする見解 Взгляд на русскую словесность в течение 1824 и начале 1825 годов》の中で、「《バフチサライの噴水》の序文にたいする批判はその結果をもふくめて、論題の点はともかくとして、叙述の点で非難に値する。この種の人物は多くの者の文学者にたいする不信を是認することによって文学を害するものである」<sup>2)</sup>と手厳しく決めつけられたからである。

この頃、ヴァーゼムスキーと А. А. ベストウージェフとは、政治的見解の点でも、文学的傾向の点でも、全くおなじ立場に立っていた。彼らは等しくロマンティシズムの斗士であって、しかも、双方とも、この頃ロシアのロマンティシズムの勢力を二分していたドイツ系とフランス・イギリス系のうちの後者に属していた。彼らは、観念論的美学や自然哲学や宗教的神秘主義を精神とするドイツ・ロマンティシズムとは全く無縁であって、ロマンティシズムとは何よりもまず歴史的なもの、社会的なもの、国民的なものにたいする関心であり、個性解放のイデーであり、文学におけるあたらしいテーマと形式のための戦いで

1) 《Пушкин》， под ред. С.А. Венгерова, т. II, стр. 186.

2) 《Избранные социально-политические и философские произведения декабристов》， 1951 г., т. I, стр. 479.

あって、それ以外のものではなかった。1825 年までは、プーシキンとは別としてこの二人にルイレーエフを加えてこれを中心とするデカブリストの勢力が文壇における最も華かな活動を展開していたと云える。

## 第二章 ロマンティシズム評論の攻勢とクラッシシズム評論の終滅

### 第一節 アリマナッフ時代

1823 年から、同年発刊の《北極星》に端を発して、ロシアのジャーナリズムにはアリマナッフの全盛時代が訪れる。《北極星》は 1823-5 年の間に 3 号を出したにとどまったが、出版は異常な成功をおさめ、最初の号を売りだして 3 週間のうちに 1500 部を売りつくしたと云われる。当時としては正に驚異的な売行きであった。これは一つには、読者層の平易さと斬新さと興味とにたいする要求に応えるように編集した監修者の手腕にもよるものであるが、それと同時に、執筆陣にジウコーフスキー、グネーヂッチ、クルイロフ、ヴァーゼムスキー、プーシキン、バラトウインスキー、デリヴィク、コズロフ、グリボエードフ、ルイレーエフ、A. ベストウージェフ、トゥマンスキー、ホミャコフ、ヤズイコフ、ブルガーリン、グレーチ、センコーフスキーら、当代の錚々たる文人の名をつらねることができたこともその要因であったと考えられる。中でも特記すべきは、監修者の一人であった A. ベストウージェフの目覚しい批評活動である。彼が 1823 年から毎年《北極星》に載せた 1823, 24, 25 年の文学概観は当時批評界に清新の気を吹きこみ、文壇に大きな刺戟をあたえたという点で劃期的な時代的意味を持つばかりでなく、後にオレスト・ソモフや、特にベリンスキーが試みた年間の文学概観の先駆として批評史上逸すべからざる存在である（詳しくは 50-52 頁参照）。

このベストウージェフが自負して「《北極星》の実例は多くの模倣を生んだ」<sup>1)</sup>と書いているように、この最初のアリマナッフの成功があまたの追随者を輩出せしめたのである。すなわち、1823 年にはモスクワにライチのアリマナッフ《新しいミューズ Новые Аониды》が出、翌 1824 年にはおなじモスクワにオドーエフスキー公爵の《ムネモジナ Мнемозина》<sup>2)</sup>が、ペテルブルクにはベストウージェフ・リュエミンの《五月新聞 Майский листок》とデリヴィクの《北方の花 Северные цветы》が発刊された。1825 年以後も、《モスクワ電信 Московский телеграф》のように雑誌で空前の成功をおさめたものが出現したにも拘わらず、アリマナッフは増勢の一途をたどるばかりで、1825 年発刊の、ブルガーリンの《ロシアのタリア Русская талия》<sup>3)</sup>、コルニーロヴィッチ、スホルーコフ Сухоруков の《ロシアの古代 Русская старина》、アラディン Аладьин の《ネヴァのアリマナッフ Невский альманах》等、数えあげること困難なくらいのおびただしい増加ぶりを示して、まさに、П. ポレヴォイの云わゆる「アリマナッフ時代」が現出したのである。そして、アリマナッフの発行が企業的性格をおびてきたために、プーシキ

1) «Избранные социально-политические и философские произведения декабристов», I, стр. 478.

2) ギリシャ神話のミューズたちの母、記憶の女神 Mnemosyne より。

3) 喜劇の叙情詩のミューズ Thalia より。

ンによって альманашник という新語まで発明されるにいたった。<sup>1)</sup>

このうち、文学史の上で特に重要なのは、「ムネモジナ」と「ロシアのタリア」と「北方の花」であろう。「ムネモジナ」はシェーリングアンの団体の愛智会(後述)の機関誌的存在で、哲学的論文や文学論的論文を載せて、ロマンティシズム文芸理論の形成上重要な役割を演じている。執筆者としては、B. オドーエフスキー、キューヘリベッケル、ヴェネヴィーチノフ、その他愛智会の成員が主であった。「ロシアのタリア」は、「北極星」と「ムネモジナ」がロマンティシズムの系統に属していたのに反して、執筆陣はグリボエードフ、シャホフスコイ、ジャンドル、グレーチら、アルハイストを主体としており、掲載するものも、戯曲と演劇論が主であった。中でも、「智慧の悲しみ」の第三幕とグレーチの「ロシア演劇論」が異彩を放ち、読者の注目をひいた。これら三者の中で出版事業として最も大きな成功を勝ち得たのは「北方の花」である。このアリマナッフは「北極星」と「ムネモジナ」がデカブリストの事件と同時に姿を消した(前者は監修者ルイレーエフとベストウージェフの逮捕により、後者は自発的に)あと、ながい間大衆の要望と好みを満足させて、1824年から33年までの存続期間をとおして終始成功をおさめつづけた。この成功はひとえに監修者デリヴィクの角のない魅力的な人柄とひろい読者層をつかむ才能とに負うもので、そのことは、執筆者のリストにプーシキン、ジューコフスキー、クルイロフ、バラトウインスキー、ヴォエイコフ、ヴォストーコフ、ヴァーゼムスキー、Ф. グリンカ、グネーヂッチ、イズマイロフ、プレトニョフら、更にはヴェネヴィーチノフ、ポドリンスキー、ゴーゴリと、傾向と流派を異にする作家や批評家を網羅することができたことによっても明らかである。

A. ベストウージェフはこのアリマナッフの成功の原因を説明して、「アリマナッフの成功は少なく書くというばかりでなく少なく読むという気短かな時代的風潮を示している。今やわが国の流行の文学は袖珍的文学である」<sup>2)</sup>と書いており、П. ポレヴォイはそのほかに装幀の美麗さを原因の一つとしてあげている。<sup>3)</sup> 併し、この流行の原因はそのような表面的なものではなさそうである。それはどうやらロマンティシズムの隆昇と無関係ではないように思われる。これらのアリマナッフのうちで成功をおさめたものの執筆者を一瞥してみれば、謎は自ずから解けるはずである。「北極星」にしても「北方の花」にしても、「ムネモジナ」にしても「ロシアのタリア」にしても、その執筆者は皆ロマンティシズム乃至は新文学の樹立を標榜した人たちであった。これらのアリマナッフの成功に、われわれは新文学を要望する時代の趨勢を読みとることができるわけである。要するに、この成功は、従来の雑誌が或いはマンネリズムに墮して退屈をきわめ、或いはあまりにも専門にわたって大部分の読者の理解と趣味にあわなくなってきたところへ、主義主張を異にする監修者たちが内容のみならず形状や体裁の面でも古い型の雑誌とちがった特色を出そう

1) プーシキンには「альманашник」という三幕物の戯曲がある。作者の生前には発表されず、アンネンコフ版で初めて日の目を見たものである。

2) «Избранные социально-политические и философские произведения декабристов», т. I, стр. 477.

3) П. Н. Полевой, «История русской словесности с древнейших времён до наших дней», т. III, стр. 170.

とした企画がうまく図にあたったというのに過ぎない。袖珍であったということも、単に当時のロマンティズムの詩のジャンルが小規模で足りたというだけのことである。このように解釈するのでなければ、1825年にH.ポレヴォイによって発刊された、ロマンティズムの、アリマナッフならぬ雑誌《電信》の成功は説明がつかないことになる。

## 第二節 アレクサンドル・ベストウージェフとルイレーエフ

アリマナッフ《北極星》に拠ってロマンティズムのために論陣を張ったA.A.ベストウージェフは、周知のように、1825年にデカブリストの蜂起に加わって捕えられてからは、最初はシベリヤへ、後にはコーカサスへ流刑に処せられたため、その間文筆活動が中断されたけれども、30年代の初めから、コーカサスの戦闘に従事しながら、《モスクワ電信》誌上でマルリンスキーという筆名を用いて再び精力的な活動を展開した作家である。それにも拘わらず、ベリンスキーが彼の文学活動を特徴づけるに当って「彼はわが文学界でおおくの新しいことを語った最初の人であった。従って、その後《電信》に書いたものは皆彼が自分の文学にたいする見解の中で語ったことの繰返しである」と書いているとおり、その文学観は前期後期の別なく一貫していたのではあるが、それでも、その説くところにはそれぞれ時代の反映が見られ、且後期のものには生長の跡も見られる。のみならず、後期の批評活動を《モスクワ電信》の編集責任者のH.ポレヴォイのそれと一括して論じた方が便利なので、彼の活動を二期にわけて、ここでは前期のそれにかぎって説くことにする。

創作の面で「散文におけるプーシキン」と呼ばれ、一時は名声の点でプーシキンをも凌ぐの概があったと云われるこの作家は、評論の領域でも積極的な進歩的ロマンティズムの理論家として登場して、その評論は同時代人によって高く評価され、且当代の文学に多大の影響をおよぼしたのであった。彼は既に1819年から《祖国の子》、《北方文庫 Северный архив》、《ネヴァの観察者》等に大小の論文を発表しはじめているが、彼の批評家としての名声が確立したのは、前述したとおり、《北極星》に発表した《ロシア文学にたいする見解》以来である。

そして、1823年に《北極星》に発表した《ロシアの古代文学と新興文学にたいする見解 Взгляд на старую и новую словесность в России》という論文がその最初のものであった。題名が示すように、論文の筆者は其中で、ロシアの古代から当代にいたるまでの文学の概観をこころみている。文学概観と云えば、既にこの種のものとしてはメルズリャコフその他の先蹤があるから、この概観は当時においても決して目新しいものではなかったろう。そして、そこに示された一連の古代からの詩人にたいする短評も、確かに、簡にして要を得た、的確無比と云えるものではあるが、それとても或いは大部分先人の業績に負っているのかも知れない。ところが、筆者が主張しようとしている点は明らかにそこにあるのではない。この概観は、量から云えば論文の大部分を占めているけれども、それは結局、この頃は「物を書く者の数に比して独創的な作家の数が……いかに貧弱な状態にあった」かを示すための材料でしかなかったのである。このようにロシア文学の貧しい遺産を呈示したあとで、筆者はその貧しさの原因をさぐろうとする。ここにおいて彼の啓蒙主義者デカブリストとしての面貌が遺憾なく露呈する。彼はまずその原因の根底に嘆かわし

い社会の現状を捉えてこれに批判のメスを揮うのである。ロシアには、その広大な土地に比して、教育機関の数が少ない。しかも、優秀な教師が不足し、書籍が高価で、雑誌の数が少ないということが地方への文化の滲透をさまたげている。かてて加えて、地主階級の頭は低俗であり封建的である。「或者は学問のゴルディウスの結び目を 軽蔑の剣で断ちきってしまって、子供たちに勉学の苦勞をなめさせようとはせず、従って子供の智能はみがかれることなく放置されている、それも往々にして犬追獵などに凝っているためである。」一方首都では、「青年は下らないものにたいする情熱に捉われて、誰も金にならぬ不利な作家などという職業に身をささげようとはせず、たとえ物を書いても、仕事として書いているのではなくて、ふざけ半分に書いているのである。」「作家について云えば、まず目につくのは、彼らの多くが流派をつくっているが、その流派たるや頑迷さに災されて言葉の完成が阻害される底のものにすぎないことである。また或者は輿論なるものを尊重せず、ただ友だちの賞讃に覚めることのない眠りに落ちているにすぎない。」このような時に、そして詩人が、学者が、「自分の著書が本屋の店頭で亡びてしまうのを見、それが沈黙をもって迎えられるだけなのを見る時、褒賞のかわりに嘲笑しか聞かれない時に、ケシ粒ほどの現在でも、果してこれを遠い将来の不確かな月桂冠と取りかえる気になるだろうか？」これがロシアの文壇の現状である。併し、ベストウージェフは、社会機構の不備が生むこの連鎖的な障碍にも絶望してはいない。「時は見えぬ間に啓蒙開化の種を蒔く。現在ロシアの文壇にかかっている霧が芽生えをさまたげてはいるが、堅固な意志さえあれば、穂も出、ゆたかな収穫も約束されるはずである」<sup>1)</sup> という結びの言葉には、社会の進歩を信じて疑わない、蜂起以前のデカブリストの希望に燃えた世界観の一端が窺われる。

彼はさらに、「1824 年間及び 1825 年初頭のロシア文学にたいする見解」の中でも、文壇の現状について、ヴァーゼムスキー同様、「わが国には批評はあるが、文学はない」と宣言して、同様次のようにそのよって来る原因について考察を進める。ロシア人は外国文化特にフランス文学のみによって養われてきているために自国の文学作品を外国の天才の尺度でしか計る術を知らず、「われわれが持つ下らぬものを片っ端からこきおろすだけで、真に誇るに足る抒情詩人や寓意詩人」の価値を見いだすことを知らない。併し「今やわれわれは感じはじめ考えはじめている。」「生命は不可避的に行動を要求する。」だが、行動の目標を知らないためにわれわれは「手当り次第のものに飛びつくだけである。」揚足取りだけを事とする論争のみに明け暮れている批評界の不様な現状はここに起因している。こう説き来った上で、論者は真の批評の在りかたについて次のような見解を述べる。すなわち、「自画自讃と褒めあいと不当な悪罵が極端にまで達している所では」偽りの名声や自負心を粉碎し「自称文学者を暴露するために、批評は不可欠である」、ただ望むらくは、「批評家が句読点などに拘ずらわることなく、もっと普遍的な目を持つことである」と説いて、批評が作品の方向を指し示すべきものであることを教えるのである。

ここから彼は更に論を進めて、ロシアの文学界にはなぜ天才が出ないかという問題に移る。彼はここでロマンティスト特有の昂揚した精神から俗世間に阿ねることしか知らぬ詩

1) 以上、「Избранные социально-политические и философские произведения декабристов», т. I, стр. 466-468.

人たちを叱咤する。彼はこの問題にたいして「賞讃が欠如しているからだ」という予想的な回答を設定して、これを否定した上で、「ホメーロスは乞食をしながらもおのれの不滅の歌をうたい、」<sup>1)</sup>「ローマ人のアルフィエリや測り知れぬバイロンは身につけていた運命の女神の金鎖を傲然とかなぐり棄てて、上流社会のあらゆる誘惑を卑しんだ——その代り全世界は彼らの支配下にあり、永遠の榮譽が彼らの遺産となっている!!」と、古来天才が迫害や窮乏の中にありながら未来の榮譽のみを目ざして「完成への道」を歩んだ実例を示すことによって、真の詩人の生き方を教示する。

そして彼は更に当代の詩人たちの外国模倣にたいする批判に乗りだす。彼は、「われわれは模倣欲に屈している。われわれには時処もわきまえずにスターン風な吐息をついていた時代もあったし、フランス流に女の御機嫌をとっていた時代もあったが、今はドイツ風に九天の彼方に飛び去ろうとする。いったい、いつになったらわれわれは自分の軌道に乗るのだろうか？ いつになったら直接ロシア流の書きかたをするようになるのだろうか？」と歎き、「すべて典型的な天才というものは、民族の刻印のみならず自分の生きる時代と場所の刻印をもおびているものである。従って彼らには他人の態様を奴隸的に模倣することは不可能だし、不似あいなのだ。有名な作家の作品はわれわれの作品の価値の尺度でしかあってはならない。かくすることによって初めて他人の高い観念が真の詩人の魂にそれまで知りえなかった観念を生むことになるのである。それは天文学者が云うように、軌道からそれた星の破片から他のすばらしい世界が形造られるというのと同じである」<sup>1)</sup>と説いて、国民的な独自性あるロシア文学の創造を呼びかけている。

K. ルイレエフの文学観は以上の A. ベストウージェフの所論とほとんど一致している。違うのはスタイルだけである。すなわち、ベストウージェフのスタイルが情熱的で、やや非論理的であるのに対して、ルイレエフのそれは冷徹で整然たる論理によって構成されている。ルイレエフは、論文の方はベストウージェフほどに手がけていない。ここで取りあげようと思っているのは、1825年に《祖国の子》の紙面を借りて公けにした《文学に関する若干の考察 несколько мыслей о поэзии》という論説である。

ルイレエフはこの論文の中で、ベストウージェフ同様、ロマンティズムの闘士として登場している。が併し、彼のいうロマンティズムとは、当時世上に云われ、また現在も云われているようなものとはかなりの径庭があって、もっと範囲が広く、古来からの完成された独創的な文学全体を指しているのである。そして彼は世人が設けたクラッシズム文学とロマンティズム文学の区別を認めず、過去現在未来を通じて存在するのは「独自性ある真の文学だけである」と主張する。

ルイレエフは当時行われていた文学にかんする誤った観念をつぎつぎと覆えして真の文学とはどのようなものであるかを明示するに当り、まず古典的という言葉の発生から説きおこして、次のような説をたてる。この言葉は、中世において学者が古代の模範的な作家の作品を弟子たちの読物に選定した折に発生したのであって、ホメーロス、ソフォクレス、ヴェルギリウス、ホラーチウスらが古典詩人と云われるのはそのためである。ところ

1) 以上、《Избранные социально-политические и философские произведения декабристов》，т. I, стр. 469-473.

が、ここから次第に、教師も弟子も、古代の作家を模倣すれば古代の詩人たちが達しえた高い段階に到達しようという誤った観念を抱くにいたった。ここに文学は独創性を失いはじめる。ラシーヌ、コルネーユ、ヴォルテールの作品で古代に取材したものが成功し、形式だけを古代文学から借りて最近の歴史に取材したものが不成功におわっているのは、この迷誤の必然的結果である。これともう一つ今日の文学に害を及ぼしているのは、古代の詩人を大小の別なく無差別にクラシックと呼んでいることである。かくして誰も彼もが「自分に他人の意見の枷をはめ、文学の天才にたいする模倣のために翼をうしない、アリストテレスやその無能な追隨者の筭の指ししめす目標へとひかれていった」のである。そして、あたらしい道を切りひらいて自分自身の理想にむかって邁進し、古代文学の精神や形式を模倣することなく、ただ自分の靈感のみに導かれて独創的な作品を創造する幾人かの天才が現れた時に、これを古典文学と区別するために、ドイツ人がロマンティズムの文学と名づけたのである。タッソー、シェクスピア、アリオスト、カルデロン、シラー、ゲーテらの文学がそれである。

ここから、独自性ある文学をことごとくロマンティズム的文学と称するルイレーエフ特有の見解が生ずる。こうして彼にあってはその範囲が拡大されて、ホメーロス、ピンダロスでさえ独創的であるという意味で「ギリシャのロマンティズム的詩人」と見られ、これまで行われていたロマンティズム文学とクラッシシズム文学の境界が外されて、時代々々によってちがう時代精神や教育の程度や地方性を持つ形式と本質によってしか区別しえない真の文学だけが残されることになる。

そして彼はクラッシシズム、ロマンティズムの区別のかわりに新たに古代文学と新興文学の範疇を設定して、両者の相違点について次のように考察をすすめる。「現代の文学は有形的であるよりも、より多く内容的である。現代の文学がより多く思想を持ち、古代文学がより多く情景を持つのはそのためである。また、われらは普遍的なものをより多く持ち、彼らは個別的なものをより多く持っている。」彼は更にこの「新興文学」を細分して、ダンテの《神聖喜劇 *Divina Comedia*》と、たかい宗教的観念をふくむタッソー、ミルトン、クロップシュトックの叙事詩の魔術と、それにシラー、ゲーテ、バイロンの叙事詩や悲劇にあらわれる、高遠なる何ものか、無限なる何ものかへの秘かな憧憬と情熱との戦いとのわけを。

論者は更に、ふたたび目を云うところのクラッシシズムに転じて、その誤った志向を痛烈にこう批判する。例えば、古典劇の三一致の法則は、アテネやスパルタ等古代の共和国が一つの都市から成っていたために、事件がすべてその都市の中だけで発生し進行し終結したという事実から導きだされたものである。然るに、大なる人口と広大な面積をもつ国家が群立して交通が繁くなっている現代においては、一つの事件が一つの都市の中だけで発生し終結するようなことはない。ここに現代劇に三一致の法則が適用されえない理由が存在する。が、かと云って、ルイレーエフは三一致の法則を全面的に拒否するのではない。彼は、詩人が描こうとする事件が古典劇の形式と一致する場合には、その適用を妨げるものではないとしている。彼が強く反対するのは、この法則を守ることに汲々たるの余り、歴史の真実をまげてしまうことである。ここにおいて、彼は創作の完全なる自由を主張する。併し、この創作の自由に伴なう困難をも指摘することを忘れてはいない。彼は、「さま

ざまな事件を、それらが目標への志向の点で調和し完全なる劇を構成するように完全に一つのものに結合するということは、三一一致の法則を守って劇を書くよりもむしろかきである」と云っている。

彼はまた、文学を性急に定義することにも反対する。文学を規定することにおいては彼は懐疑主義者である。彼は、文学自体をも、文学の理想をも規定することは不可能であるとし、無益であると説く。これは、ロマンティズムがクラッシズムの文学の定義の破壊から出発したことと関連がある。

ルイレーエフは最後に結論として、ベストウージェフ同様、次のように、外国文学への模倣を排して、独自性のある文学の創造を提唱する。「古今の偉大な労作や優れた作品によってわれわれはそれらにたいする尊敬の念を鼓吹さるべきではあっても、それは決して崇敬の念であってはならない。何となれば、それは、至純なる倫理性の法則に反し、人間の尊厳を汚し、それと同時に、賞讃する詩人に近づくことを妨げその欠点を見出すことを妨げるところの一種の畏怖感を植えつけるからである。このように、われわれは文学を崇めても文学の僧侶を崇めることなく、ロマンティズムとクラッシズムの無益な論争をやめて、奴隸的模倣の精神を根絶することに努め、真の文学の根源に向って、常に人間に近いけれども常に人間に十分にはわかっていない高い感情や思想や永遠の真理の理想を自分の書くものの中に具現することにあらゆる努力を致そうではないか」<sup>1)</sup>

以上述べ来たところから、ヴァーゼムスキー、A. ベストウージェフ、ルイレーエフ三者の主張がかなり似通っており、共通点を有することは明らかであろう。彼らは等しく文学を社会との関連において見、ロシヤにはまだ「真の文学はない」と宣言し、外国文学にたいする猿真似を排して、独自の国民的ロシヤ文学の樹立を呼びかけている。これが後に「進歩的ロマンティズム」の評論と規定されたところのものであることは云うまでもない。

### 第三節 クラッシズム評論の衰滅

1823, 24 年がロシヤのロマンティズム文芸評論の攻勢と発展の時期であったということは以上の説明によってもほぼ推察がつくことと思うが、これは、無論、評壇のみに限られた現象ではなくて、文壇全体の趨勢であった。作品の領域においても、上述したとおり、プーシキンは文壇の先頭に立って、「ルスランとリュドミーラ」、「コーカサスの捕虜」、「バフチサライの噴水」と、着々とロシヤ文学のあたらしい世界を開拓し、ルイレーエフは「佞臣に与う К времени», 「市民 Гражданин」等の書き写されて四方に流布した革命的抒情詩で青年たちの血を沸かし、A. ベストウージェフは旅行記「レヴェリ紀行 По-ездка в Ревель」や中篇小説「ロマンとオリガ Роман и Ольга」、「裏切者 Изменник」、「ヴェンデン城 Замок Венден」、「レヴェリのトーナメント Ревельский турнир」等を矢つぎ早に発表して一躍文名を馳せ、ジウコーフスキーはエレジー「昼の天体は消えた По-гасло дневное светило」、抒情詩「海 Море」、バイロンからの反訳「シヨンの虜囚 Шильонский узник」等において依然として持前の麗筆をふるい、そのほかにも傾向をお

1) «Избранные социально-политические и философские произведения декабристов», т. I, стр. 556-557.

なじりする、バーテュシコフ、バラトウインスキー、デリヴィク、コズロフ、ホミャコフ、ヤズイコフ、キューヘリベッケル、ヴェネヴィーチノフらの詩篇が雑誌界に氾濫し、果てはクラッシシズムのカチェノーフスキーまでが 1821 年にフランス語訳からの重訳で《バイロン選集》を出版すると云った調子で、刊行物のほとんどがロマンティシズム調の詩で埋められるにいたった。そればかりではなく、批評界でも、前記のヴァーゼムスキー、ルイレーエフ、A. ベストウージェフらに或いは追随し或いは同調するプレトニョフ、ポゴーチン、グレーチ、ブルガーリンらの評論も雑誌やアリマナッフを賑わし、後述するように、ソモフ、ガリーチ、愛智会のメンバー等、ロマンティシズム文芸理論の樹立を企てる者も続出するような有様だったのである。読者層、特にわかい読者層が旧態依然たるクラッシシズムの無原理の評論よりは、新鮮で華やかで魅力的なロマンティシズムの評論のほうにより多くひかれるようになるのは理の当然である。事ここにいたっては、雑誌にとってこの魅力あるロマンティシズムに全く背を向けてしまうということは、もはやおのれの生命を危殆に瀕せしめるに等しかった。批評家についても同じことが云える。批評家が、新傾向の作品、中でもわかい読者層の魂をつかんで名声の既に確立しているプーシキンの作品などを真向から批判すれば、読者の目に自分の姿を滑稽なものとして映じさせるばかりでなく、ひいては文名までも落すことを覚悟しなければならぬ段階に到達していたのである。1824 年頃から批評家たちのロマンティシズムへの傾斜や転回や一時の韜晦が露わとなり、それに伴って批評界全体が変貌をとげるにいたった事実は、正にこのような事情に由来していたのであった。

ところで、この場合、批評家の変貌とは云っても、それは人によって様々である。意識的な者あり、無意識的な者あり、心からロマンティシズムに改宗した者あり、単に擬態のかげに隠れただけの者あり、多種多様であった。その千差万別の変容は、1824 年の《バフチサライの噴水》にたいする評壇の批評に、もっとも端的且鮮明な反映を見ることができる。以下、その模様を具さに観察してみることにする。

例えば、《ルスランとリュドミーラ》の時には、作者に同情的な素振りを示しながらその実遠慮会釈なく批評のメスをふるった ヴォエイコフがこの度の《文学ニュース Новости литературы》 所載の長大な論文《A. C. プーシキンの叙事詩、特に《バフチサライの噴水》について О поэмах А. С. Пушкина и в особенности о Бахчисарайском Фонтане》<sup>1)</sup> では、「構想は巧みでもないし複雑でもないがその展開のしかたが巧妙である。その進行は軽快であり、脈絡は自然であって、興味は時の進むにつれて増大する。人物には愛着をおぼえるし、シチュエーションには感動をおぼえる」などと書き、全体としては作者の新作を前の二篇の叙事詩よりも「比較にならぬほど高く」位置づけている。また、《祖国の子》 所載の M. M. コルニオリン・ピンスキー Корниолин-Пинский の長文の評論<sup>2)</sup> の中では、プーシキンとバイロンの比較論が展開されて、「バイロンはわが国の詩人(プーシキン——筆者)の手本となった。が併し、プーシキンは通常偉大な芸術家が倣うようなしかたでこれに倣ったのである。このイギリス人の描写では人物たちの偉大さに驚嘆させ

1) 《Новости литературы》, кн. 7, No. 11, 12. «Разбор «Бахчисарайского фонтана»» в No. 12, стр. 177-189. Подпись: В.

2) 《Сын отечества》, 1824 г., ч. 92, No. 13, 31 марта, стр. 270-281. Подпись: Ый-Ъ-йй.

られる。が、その人物たちは恐ろしい。そして仕上げられているからこそ美の世界に属しうるのだ。彼らは皆一つの世界の人たちである。ロシアの詩人のものでは人物が十分には完成されていないが、より魅力に富んでいる。そして、彼らは思想の点でより多種多様である」と、プーシキンの優位が主張されている。これはほとんど無条件的なプーシキン礼讃の一例と云えよう。更に、クラッシシズムの典型的な批評家の B. フォードロフは《善意者》にのせた論文<sup>1)</sup>の中で、宦官の描写にあまりスペースを割きすぎるとか、マリヤとザレマの死の描写が不完全であるとか、さまざまな欠点を挙げ、個々の表現の揚足をとりながらも、プーシキンを高く持ちあげている。その癖一方では「新流派」全体を攻撃しているのである。これは、「新流派」の勢力減殺を意図しながらも、定まった世評には一步譲って、プーシキンの功績をけなしたりなどして大衆の目に自分の滑稽な姿をさらすまいとする当時のクラッシシズムの批評家の常套手段であった。

中でも微妙なのは、B. H. オリンとブルガーリンとの確執である。前者はバイロンの《海賊》を訳しているくらいで、ロマンティシズムにも理解がないわけではない。そういうオリンがブルガーリンの《文学新聞》に論文<sup>2)</sup>を発表して、その中でプーシキンの叙事詩を「わが国の文学界における素晴らしいフェノメノン」と称する一方、その構想の不備を指摘して、主人公ギレイの性格に一貫性がないとか、「物語の登場人物中一人として性格を持っている者はいない」とか、筋の移行があまりにも「急激であり、断続的である」などと幾つも欠点をあげた揚句、最後をそれでいて「詩と言葉の魅力」がこれらの欠点を感じさせないという言葉で結んでいる。ところで、ブルガーリンはこの論文を自分の雑誌にのせておきながら、それに注を付して、その中で論文の筆者に反対しているのである。彼は、「クラッシシズムの文学様式もロマンティシズムの文学様式もいずれも」認めていないと言明しながら、その実明らかに、「自然の」システムであるロマンティシズムのそれに加担するような論調で、「もし作品中の諸事件の間にたがいに脈絡がないとすれば、それは自然の運動の欠陥であって詩人はその間隙に覆いをかけているのである。われわれの見るどころでは、A. プーシキンの叙事詩には、云わゆるロマンティシズムの様式のすべての属性、すなわち全体の調和と、それに人を感動させ人の記憶に刻みこませる心理の動きのいきいきとした描写がある」などと書いている。これにたいして、オリンは更に、1825年になってから、《ロシアの廢兵 Русский Инвалид》にブルガーリンにたいする回答<sup>4)</sup>をのせて、自説の解説と弁明をおこなっている。

この割合良心的なオリンと腹黒い便乗者ブルガーリンとの取合せは妙というほかはない。周知のように 1826 年以後手の平をかえたような豹変ぶりを見せ、第三課と通じてスパイ的行動をとって、多くの文学者に蛇蝎のように嫌われるようになったこのブルガーリンも、この頃はまだ、その本心のほどは疑わしいにしても、ともかくもロマンティシズ

1) 《Благонамеренный》，1824 г., ч. 26, No. 7, стр. 53-67.

2) 《Литературные листки》，1824 г., ч. 2, No. 7, апрель, стр. 265-277.

3) 《Литературные листки》，1824 г., ч. 2, No. 7, стр. 266, 268, сноска.

4) 《Русская критическая литература о произведениях А.С. Пушкина》，ч. 2, стр. 1-6. Статья Олина, под заглавием: «Ответ Г-ну Булгарину на сделанные им замечания к статье: Критический взгляд на Бахчисарайский фонтан, помещённой в 7-м номере Литературных листков минувшего 1824 года». Из «Русского Инвалида» 1825 г.

ム陣営に属して、進歩的な評論家の中に数えられていた。また、それだけに、ロマンティシズムの詩人や批評家とも交渉がふかく、従って彼らからの受けも悪くはなかったのである。たとえば、A. ベストウージェフは1825年のブルガーリンによる《北方の蜜蜂 Северная пчела》の発刊を歓迎して、「わが国では政治上のニュースと文学上のニュースとを結合するような、日々のニュースのための新聞に事欠いている。グレーチ、ブルガーリンの両氏はわれわれにそれを提供してくれた——それは《北方の蜜蜂》である。内容の多種多様さやニュースの報道の迅速さや発行の定期性や体裁で、それは完全にその目的を実現している。人は身分年齢に応じてそれぞれそこに何ものかを見出すことができる」<sup>1)</sup>と書いているのみならず、その書くものについても、「ブルガーリン氏が自分の作品を完全に仕上げる余裕を持っていないのは残念である。そこには何か云いつくしていないものがある」とその不完全さを指摘しながらも、「しかし彼の観察眼と面白いほどに曲折のある頭の働きをもってすれば、彼は容易に牢固抜くべからざる名声を獲得することもできるはずだ」と彼を讃えてさえいる。このような当りのよさは、批評に際してベストウージェフが誰にたいしても示した態度には違いないが、この当時のブルガーリンの行動の好ましい印象がなかったならば、これほどの寛大な批評は望めなかったろう。

ところで、ここに注目すべきは、時代の風潮に従ってたやすく転身をとげる片々たる群小批評家とはちがって、自己の感覚に忠実であり極めて良心的であったクラッシズムの陣営の大立物の A. Ф. メルズリャコフの場合である。彼は1804年にモスクワ大学の教授になって以来教壇でロシア文学を講ずるかたわら、1812年からは公開講座もひらいてモスクワの文学愛好者の間で大成功をおさめ、また、かなりの数に上る詩作品も残している。彼には《文学論概要 Краткое начертание теории изящной словесности》や《簡略修辞学 Краткая риторика》などの教科書用の述作もあるが、これはバウムガルテンやイギリスの美学者の思想をとり入れたエシェンブルクの著書《文芸の理論と文献の草案 Entwurf einer Theorie und Literatur der schönen Wissenschaften》に準拠したものである。このように、彼の文芸理論はすでに時代遅れの誹りをまぬかれなかったが、古典作家の批評の領域では他の追随を許さぬものがあつた。この方面において彼はスマローコフ、ヘラスコフの欠点をあばき、ロモノーソフ、デルジャーヴィンを賞揚して、早くもナデージデンやベリンスキーの古典批評の道を切りひらいていたのであって、その評価は、ベリンスキーが後に《文学的空想 Литературные мечтания》の中で試みたそれとほとんど一致しているほどの感覚のよさを示している。その位であつたから、彼はあらゆる作品をクラッシズムの文芸理論の尺度だけで計るような愚かしい真似はしなかつた。上記の著書の中でも「文学作品は感覚と好みの対象である以上、厳格な規則などにしばられうるものでもないし、恐らくは、永久不変のシステムや美学も持たないものであろう」と述べており、また、講義の時には自分の胸を指さして、学生に「システムはここにある」と教えたとも伝えられている。しかし、それと同時にここに批評家の美学的ドグマティズムにたいする信仰の喪失が見られるわけである。この結果彼が理論と個人的印象との間を絶え

1) «Избранные социально-политические и философские произведения декабристов», стр. 465.

2) Там же.

ず動揺していたことは、一方では《コーカサスの捕虜》を読んで感動しながら他方ではおなじ作者の《ジプシー》を「粗野」呼ばわりしたという事実からも、またバラードを「規則に背いた、奇怪な、馬鹿げた」文学ジャンルと見、その「馬鹿げた空想の怪奇な構想」に憤慨しながらも、「われわれロシア人をバラードに親しませてくれたのは——全く仕合せなこと——ジューコフスキーであった」という言葉を洩したという挿話からも窺うことができる。

こうした思想と作品の受容のしかたの二重性、理念と感覚の不一致は、詰るところ、ふるい理論があたらしい作品の解釈に役だたなくなってきたことを物語るものであり、クラッシズムの理論が早晩消滅すべきものであることを証するものである。かくして、20年代の半ば頃には既に純然たるクラッシズムの批評家として残ることは不可能となって来ていたわけである。

### 第三章 ロマンティシズム文芸理論の形成

#### 第一節 ソモフとガリーチ

先の二つの章でわれわれはヴァーゼムスキーや《北極星》の監修者たちの評論の大体の輪郭をつかむことができ、彼らの主張がどのようなものであったかを知ることができた。彼らは確かにロマンティシズムのために戦い、ロマンティシズムの発生とその正当性について考察もし、主張もしている（たとえば、ルイレーエフの《文学にかんする若干の考察》の中で）。が併し、それらはいかに烈々たる情熱と不拔の精神とに支えられ、且前進性を持ち、またその故にこそ青年層に働きかける力も大きかったとは云え、所詮思想の断片の集積でしかなかった。A. ベストウージェフが愛智会の《ムネモジナ》に触れた際に、「理論を樹立しようとする情熱は現代の特徴の一つである、その癖著者たちが自から実践の際にそれを覆えてしまうのだが」<sup>1)</sup>と愛智者たちの理論と創作面の実践との不一致を暗に嘲笑しているように、彼らは飽くまで主張と実践との一致を目ざすことを忘れなかった反面、所論を大系的たらしめようという努力に欠けてもいた。それどころか、ルイレーエフなどにいたっては、既述のとおり、文学を規定することを不可能としてその努力を放擲さえしてしまっている。このようなわけで、ロマンティシズム文芸理論の樹立の仕事は他の評論家の出現に俟たねばならなかったのである。<sup>2)</sup>

ロシアで最初にこの仕事に手を初めたのは恐らくオレスト・ソモフではなかったかと思う。彼は当時の評壇でかなり重要な位置を占めていた評論家であり、同時に詩人でもあり作家でもあった。彼は1823年、つまり《北極星》が発行の開始を見た年に、雑誌《競争者 Соревнователь》に《ロマンティシズム文学論、三つの論文による試論 О романтиче-

1) 《Избранные социально-политические и философские произведения декабристов》，стр. 478.

2) A. ベストウージェフには、《ロマンティシズム論 О романтизме》という小論があるが、これは1826年頃に写されて扱われたものであるし、それに内容的にも見るべきほどのものではない。彼が大系的な理論の創造を志したのは、むしろ後期のことであり、《モスクワ電信所載の《長篇小説とロマンティシズムについて О романах и романтизме》》においてである。要するに、1823-4年頃の彼はこの種の仕事にあまり関心を示さなかったと見るべきであろう。

ской поэзии, опыт в трёх статьях» を発表して、その中で彼はスタール夫人の《ドイツ論》を利用してロシアに新たに発生してきた詩学の諸原理を統一しようと企てたのである。<sup>1)</sup> 彼はロマンティズムの文学をギリシャ・ローマ的世界の文学に対立するキリスト教的ヨーロッパの文学であるとし、この文学は「制約的規則の軛」から自由であり、詩人にたいして「選択と叙述の完全な自由」を提供するものであって、その時間的空間的範囲は「中世」やヨーロッパだけに限らず、東方世界にまで及び、その「主なる魅力」は「民族性と地方性」、すなわちいわゆるローカル・カラーにあるとしている。そして、この「民族性と地方性」、すなわち文学の国民的性格の強調がこれらの論文の中心点をなしている。ソモフは、「民族の文学は民族の風俗習慣や生活様式の、言葉で語る絵画である」という基本的命題から出発して、ロシアだけにでも、そこに住む、「芸術のための汲みつくしえぬ源泉」を提供しうる諸民族のおおくの「さまざまな風貌と風俗と習慣」があると説く。これが彼の諸論文を貫ぬく基本的見解であって、それはまた小ロシア人である彼の民族的自己主張でもあったわけである。それに、彼自身の創作活動の性格の決定もこの信念に基づいているのであって、彼はアリマナッフの《北極星》、《北方の花》、雑誌の《ウクライナ通報 Украинский вестник》、《祖国の子》等にウクライナの伝説に取材した中篇小説をいくつも発表して、わかきゴゴリの進出の道を切りひらいたのであった。<sup>2)</sup> ルイレエフとの交友関係から推して、彼の、ヴォイナローフスキー、フメリニーツキー、マゼーパ等ウクライナの過去の英雄の事績をうたった叙事詩やドゥームイも、これと無関係であったとは考えられない。(ソモフが主張したこの「民族性」の問題が、ロシア文学のロマンティ

1) ソモフがいつからロマンティズム擁護の立場に立つにいたったかについて、資料の示すところは今のところ不完全である。たとえば、トマシエーフスキーは、1821年にはソモフはまだ「反動的作家群(ツェルターレフ、B. フォードロフら)の中に入っていた」と書き、その上、1824年に《パフチサライの噴水》が出た頃でもまだ、「彼《ガレルナヤ港の住人》(O. ソモフ)は彼(ツェルターレフ)と呼応して《善意者》や《ネヴァの観察者》の誌上で評論の筆をとった」としている。(См. Б. Томашевский; «Пушкин», I, стр. 342, 515) これに対して、Н.Л. Степановは「彼は20年代のそもその初めからロマンティズムの擁護者とし理論家として筆をとっている」と記述している(См. Институт русской литературы Академии Наук СССР, «История русской литературы», т. VI, стр. 514.) これらのほかに、後者の説の傍証としては、トゥイニャーノフのものがある。それによれば、「1822年にはグレーチの《簡略ロシア文学史試論 Опыт краткой истории русской литературы》をめぐって、ベストゥージュエフ、グレーチ、ソモフ対カテーニン、パフチン(カテーニンの弟子)の論争が持ち上っている」とある。ベストゥージュエフ同様、グレーチはこの頃新流派の陣営に属していたのであり、従ってO. ソモフも1822年にはその側に組みしていたと考えられるわけである。(См. «Пушкин в мировой литературе», 1926 г., стр. 227.) そればかりではなく、ソモフはルイレエフやベストゥージュエフと一つ屋根の下に起居を共にしていたことがあり、《北極星》の発行には積極的な協力を惜しまなかった。そしてこの交友のために1825年の事件のあとでは逮捕されたほどである。しかも、1823年には例のロマンティズムに関する論文を発表している。これらの資料を総合して判断するに、彼が1824年にいたるもまだ反動陣営に属していたとなすトマシエーフスキーの説にはいささか疑問を持たざるを得ない。筆者は他日、資料の入手を俟ってこの点を明らかにしたいと思っている。

2) 1820年代の半ば頃からロシアではウクライナにかんする関心が大いに高まったことがある。1829年4月30日付の母親当ての書簡の中でゴゴリも「当地(ペテルブルク)では今、小ロシア熱が非常に高まっています」とこのウクライナ・ブームについて伝えている。これはM. A. マクシーモヴィッチの《小ロシア民謡集 Малороссийские песни》の出版の刺戟にも負っているが、ソモフらのこの方面の文学活動もその重要な要因となっていたのである。

シズムからリアリズムへの推移に平行して、ヴェネヴィーチノフからゴーゴリへ、ゴーゴリからベリンスキーへと継承されて、次第に究明され、深化され、発展していく過程については、後章において述べるつもりである。）

このソモフのあたらしい詩学の原理を統一して、更に一層体系的なものにまとめあげたのは哲学者の A.И. ガリーチである。彼は 1808 年に政府の命令で外国へ派遣されて、シュールツェ Schulze, ブッテルヴェーク Butteweg について哲学を学び、シェリングに私淑して、帰国後ツァールスコエ・セローのリツェイでラテン語を、次いで教育専門学校の大学昇格後は哲学の講義を受けもち、《哲学体系史 История философских систем》(1818-19)、《美学試論 Опыт науки изящного》(1825) 等の著書を出して、シェリングの美学を基礎としたロマンティシズムの体系的な理論の創始者としてロシア批評史に大きな足跡を残している。彼は 1825 年に刊行した《美学試論》ではシェリング、シュレーゲル兄弟、ブッテルヴェーク、アストラドイツの権威たちに追従しながらも、或程度独創的な見解をも展開している。彼はこの著書の中でロマンティシズムとクラッシシズムにかんする問題について広範な考察を試みているのであるが、彼が下した結論の中で最も重要な点は、クラッシシズム的好みの絶対的憂越を斥けて、「詩的普遍性」もしくは「普遍的析衷主義」なるものを唱道したことである。この主義の要結は、ボワローの典範のような一定の面的な文学的法典によらずに、すべての時代、すべての民族の芸術作品を承認するということである。この著書の中でガリーチは、美なるものとは、天才の精神的諸力の自由なる活動による、真理の感性的に完全なる表示であるとし、この表示の普遍的な条件と法則を解明することが美学の使命であるとしている。そしてガリーチは更に、芸術作品には無限なるイデーの有限なる形象による表現という定義を下しており、また倫理的に完全なる力の発現としての芸術創造は自由でなければならぬと主張し、詩人の作品は神的なイデーを有すると説いている点など、シェリングの思想とそれを基礎とするドイツ浪漫派の美学思想をとり入れた形跡は明瞭である。<sup>1)</sup>

併し、何と云っても、ガリーチは哲学者であって、実際の創作の面にたずさわってはいない。このシェーリング的ドイツ浪漫主義的美学思想を更に一層ふかく研究してロシアのロマンティシズム文芸理論の樹立に利用しただけでなく、これを創作的実践の面にも応用したのは、わかいシェリングアンの愛智者たち、特に B. Ф. オドーエフスキーであった。

## 第二節 愛智会. B. オドーエフスキーと Д. ヴェネヴィーチノフ

1822 年にモスクワに、当時有名な文学者で大学付属寄宿学校の教授であった C. E. ライチを中心に、その教え子やモスクワの青年文学者たちから成る文学サークルが発足した。この会には B. Ф. オドーエフスキー、M. П. ポゴヂン、A. H. ムラヴィヨフ、И. В. キレーエフスキー、C. П. シェヴィリヨフ、B. K. キューヘリベッケル、H. A. ポレヴォイ、Д. В. ヴェネヴィーチノフ、A. И. コシェリヨフら、やがてロシア文化史にその名をとどめる有望な人材があつまった。会の席上では歴史、文学、哲学にかんする研究報告がおこな

1) ゼニコーフスキーはその著《ロシア哲学史》の中で通説に反対して、「ガリーチはシェリングアンではなかった」と書いている。併し、それは立証を抜きにした発言で、信がおけない。See, V. V. Zenkovsky, «A history of Russian Philosophy», V. 1, p. 120.

われた。例えば、オドーエフスキーがオーケンの述作の反訳を朗読し、コシェリョフがプラトンの反訳を読み、ヴェネヴィーチノフが「雑誌の計画にたいする若干の考察 Несколко мыслей в план журнала」を発表すると云ったぐあいであった。

次いで、1823年にこの文学サークルの中で特に哲学に関心を持っていた青年たちがこれから分離して、あらたに哲学協会を創設した。これがロシアのシェリングアンの団体の愛智会 Общество любомудрия である。会長は В. オドーエフスキーで、会員はヴェネヴィーチノフ、イヴァン並びにピョートル・キレーエフスキー、ポゴージン、シェヴィリョフ、コシェリョフ、ソボレーフスキー、キューヘリベッケル、ロジャリンらであって、その中の И. キレーエフスキー、ティートフ、シェヴィリョフ、ソボレーフスキー、ヴェネヴィーチノフが外務省のモスクワ文書課に席をおいていたところから、プーシキンによって「エヴゲーニー・オネーギン」の中でモスクワの社交界の描写に利用されて、「文書課の若者たち」として描かれるところともなった。<sup>1)</sup> 協会の性格と研究業績については、残念なことに、オドーエフスキーがデカブリストの蜂起の鎮圧直後に会の規約と議事録を焼却してしまったために、その全貌を詳細に知ることはできないが、コシェリョフやオドーエフスキーのメモワールと、協会の機関誌ともいえるべき、オドーエフスキー、キューヘリベッケル監修のアリマナッフ《ムネモジナ》4巻によってその大要をつかむことはできる。

《ムネモジナ》の巻頭論文の中で、オドーエフスキーはアリマナッフの課題を定めるに当たって、愛智 любомудрие という言葉の概念規定をおこなって、「これまで人は哲学者というものを 18 世紀のフランスの饒舌家の姿として以外に想像することを知らなかった。われわれがこれと区別するために、真の哲学者を愛智者 любомудр<sup>2)</sup> と称するのはそのためである」<sup>3)</sup> と解説している。彼がここで云っている「真の哲学者」とは、カント、フィヒテ、シェリングらによって代表されるドイツの哲学者とその思想を真の哲学として奉ずる人たちのことであることは云うまでもない。オドーエフスキーは論文の中で、「フランスの理論家たちにたいする偏愛に切りをつけて」「ドイツから輝きだした新思想」をひろめることを呼びかけている。つまり、フランスの啓蒙主義を排してドイツ観念論を擁護することを、彼は協会の主目的としたのである。更に、このことを、協会の一員であったコシェリョフも自分の《記録 Записки》の中で裏書している。そのメモワールによれば、「この会を支配していたのはドイツ哲学、すなわちカント、フィッヒテ、シェーリング、オーケン、ゲレスらであった……そこでは時にわれわれは自分らの哲学的労作を読むこともあったが、もっとも頻繁に且もっとも多く話題に上したのは、自分たちが読んだドイツの愛智者たちの著書のことであった。あらゆる人間の知識の基礎たるべき原理なるものがわれわれの談話の主な話題をなしていたのである。われわれは、キリスト教の教説などは一般大衆にこそ向くけれども、愛智者たちには向かないと考えていた。われわれが特に高く評価していたのはスピノザであって、われわれはその著作を福音書その他の聖典より遙かに

1) См. «Евгений Онегин», гл. VIII, строфа XLIX.

2) Р.В. Ивванов-Лазаревскийの説くところによれば、この любомудр という言葉は、この時の発明にかかるのではなくて、18 世紀のロシアの文学作品の諸所に散見されるということである。См. «История русской литературы XIX века», под ред. Овсяннико-Куликовского, т. I, 1910, стр. 253.

3) «Мнемозина», 1824 г., ч. IV, стр. 163.

高く見ていたのである」<sup>1)</sup> とある。

しかし、彼らはドイツ哲学一般に興味をよせていたとは云え、その説くところから判断して、なかんづくシェリングに傾倒していたことは異論のないところである。殊に、オドーエフスキーにおいてそうであった。シェーリングの思想について云えば、後にオドーエフスキーが自著《ロシヤの夜 Русские ночи》の中で「その頃シェリングの哲学が人々にどのような作用を及ぼし、どのような刺戟を与えたか、諸君には想像もできないだろう」と書いているとおり、この同一哲学が 20 年代 30 年代のロシヤのインテリゲンツィヤに与えた影響には甚大なるものがあつたのである。その影響が単に愛智会のメンバーのみならず、ホミャコフ、スタンケーヴィッチ、初期のベリンスキーの精神にまで及んでいるところから見ても、その規模の大きさが察せられよう。<sup>2)</sup>

シェリングの芸術哲学がもっとも鮮明な反映を示しているのは《ムネモジナ》、特にオドーエフスキーの諸論文においてである。彼は、シェリングの観念論のモチーフから、人間の生活と人間の歴史の普遍的な目的は物質と精神との、実在的なものと観念的なものとの二つの相矛盾する要素の調和であり、それらの絶対的同一が宇宙的秩序の発展の最高段階であるという思想を汲みとった。そして、彼はその調和を、シェーリングに倣って、芸術と哲学とそれにこれら二つを統合する宗教に見出している。それゆえ、彼の見解においても、人間生活の調和の開示者は詩人と哲学者である。そして、詩人は普通人よりもこの調和を理解する能力を有するとしている。オドーエフスキーの初期の著作に見られる、芸

1) А. И. Кошелёв, «Записки», Берлин, 1884 г., стр. 12: См. «Литературные салоны и кружки. Первая половина XIX века», 1930 г., стр. 141.

2) ロシヤにおけるシェリング派の元祖はペテルブルク内外科専門学校の教授であつた Д. В. Велланский 教授である。彼は 19 世紀初葉に生理学、病理学、衛生学などの研究のために外国へ派遣された際に、シェリング哲学の基礎的要素をとり入れたブラウン派の医学を学び、帰国後、哲学的医学の論文や著書を發表することによってロシヤ人に初めてシェリングの自然哲学を紹介したのである。その後、ブレ教授、ルプキン教授らシェリング哲学の研究者があらわれ、ロシヤでは早くも 20 年代に入る前に、カント、フィヒテの労作とともに、シェリングの論文の反訳がほとんど出つくしていた。特にシェリングの哲学の普及に大きな役割を演じたのは、前出のガリーチ教授と、モスクワ大学の哲学教授のパーヴロフである。後者が 20 年代にその周囲に集まつた青年たちにシェリングの哲学を説いて、それがロシヤのシェリングアン排斥をうながしたことは有名である。しかし、それまで上記の教授たちがあつてきたシェリングの思想は、主として、自然哲学の領域であつた。そして、文献によって知れるところでは、ロシヤでシェリングの芸術哲学にかんする部分の研究に初めて手をつけたのはガリーチであり、これにシュレーゲルその他のドイツ・ローマン派の理論家たちの思想と結びつけて、それをロシヤ・ロマンティシズムの文芸理論の基盤に利用したのは、愛智会のわかいシェリングアンたちであつたのである。

序でながら、当時(1820 年前後から)ロシヤでは哲学の研究に身を捧げるといふことはわが身を危険にさらすことであつた。1818-19 年に《哲学大系史》を出した直後、ガリーチは他の三名の教授とともに、学区督学官のルニチによって無神論と革命的意図の嫌疑をかけられ、害毒を流す者として摘発された。そしてルニチは彼を、「異教をキリスト教よりも、みだらな哲学をキリスト教会の童貞尼よりも、無神論者カントをキリストよりも、シェリングを聖霊よりも好んでいる」と云つて責めたと云う。その結果ガリーチは講義をすることを禁止された。初めは員外教授の俸給と官舎だけは確保されていたが、1837 年の大学改革に際して、その生活手段をも剝奪され、その代りに糧食局付属の文書課長の席を与えられた。この不幸にもめげず、彼は著述に従事していたが、ほとんど完成されていた原稿を不慮の火事で焼いた後、落胆のあまり、飲酒にふけりはじめ、1848 年に悲惨な最期をとげた。このような例はほんの一例にすぎなかつたのである。

術家たる詩人の天才性にたいする崇拜は、ここから来ている。また、彼のロマンティズム的個人主義もまたここに根源を有する。とは云え、И.И. ザモーチンに云わせれば、「オドーエフスキーの個人主義は常に普遍的ニュアンスをおびている、というのは、彼の見解によれば、天才的個性は何よりもまず社会生活の意義の発見者であり、社会福祉実現のための手段であるからである」<sup>1)</sup> 思想家にして芸術家たる者は最高の個性であるというテーマは、彼が自己の20年代の作品において好んで取りあげたところのものであるが、彼はその中で、ティークや、ノヴァーリスとおなじように、天才人を孤独な世捨人もしくは放浪者として描いている。特に、彼の1824年の作品の《4つの寓話 Четыре аполога》では、選ばれた個性の高い目的は大衆から理解されず、従って生活の調和の開示者は自己犠牲的な創造の努力を普遍的な人類一般の利益に捧げることになるという思想を展開している。<sup>2)</sup>

このような芸術家にかんする考え方は当時の他の詩人にも影響をおよぼさずにはいなかった。気分や傾向から云ってデカブリズムに近く、自から吐露するところによれば、「ドイツの形而上学を憎悪し軽蔑していた」<sup>3)</sup> プーシキンにさえその影響の跡が見られる。この場合はむしろ、当時の大部分の蒙昧な貴族階級による無理解にたいする彼の焦燥と反抗が芸術の目的や使命にかんする愛智者たち、特に В. オドーエフスキーの見解を受け入れさせたと解すべきであろう。<sup>4)</sup> この詩人にたいする愛智者たちを通じてのシェリングズムの影響として文学史家がよく引合いに出すのは、1828年作の抒情詩《詩人と大衆 Поэт и толпа》(《俗衆 Чернь》)である。その中では詩人が俗衆の「なぜ彼はかくも高らかに唄うのか? / いたずらに耳をおどろかして / われらをいかなる目的に導くのか? / 何を弾き、何を教えるのか? / なぜ胸を騒がし悩ますのか? / … / それがわれらにどんな利益になるのか?」という囁き声を耳にすると、「黙れ、無意味な民衆、/ 日傭い、欠亡と煩勞の奴! / わたしはお前の厚かましい不平が耐えられぬ / お前は地虫で、天の子ではない」と叫んで、「われらは激動のために生をうけたのではない / 利益のためでも戦いのためでもなくて / 靈感のために / あまい旋律と祈りのために生をうけたのだ」と答えている。芸術にはいかなる外面的な目的もなく、真の芸術家は常に最高の力によって導かれる天才であるという思想は、正にシェーリングが説いたところのものである。

この頃の青年のインテリゲンツィヤでこのようなシェーリングの思想を自己の思想の中にとり入れたのは В. オドーエフスキーだけにとどまらない。愛智会の集会の席上でヴェネヴィーチノフが発表した《プラトンとアナクサゴラスとの対話 Беседа Платона с

1) «История русской литературы XIX века», под. ред. Д.Н. Овсяннико-Куликовского, т. I, 1910 г., стр. 298.

2) В. Оドーエフスキーの思想については、つぎの諸資料を参照されたい。П.Н. Сакулин, «Князь В.Ф. Одоевский. Из истории русского идеализма», 1913 г.; «История русской литературы XIX века», под. ред. Овсяннико-Куликовского, т. I, глава третья. Литературные течения и литературная критика 30-х годов (И. Замотин), стр. 296-300; V. V. Zenkovsky, «A history of Russian philosophy», v. 1, p. 134-140.

3) См. письмо Пушкина к А.А. Дельвигу от 2 марта 1827 г.

4) プーシキンと В. Ф. Оドーエフスキーとの関係について詳細に論じたものとしては、Н. Измайлов の論文《Пушкин и В. Одоевский》がある。См. «Пушкин в мировой литературе, 1926 г., стр. 289-308.

Анаксагором》は彼がシェリングの《哲学と宗教 Philosophie und Religion》を親しく知っていたことを証明しているとは、既にイヴァノフ・ラズムニックの指摘しているところである。<sup>1)</sup> また、ゼニコーフスキーも、「この時期のオドーフスキーの美的見解にはヴェネヴィーチノフのそれに似た点がおおい<sup>2)</sup>」と云っている。ポゴーデンもこの頃は「熱狂的なシェリングアンであった<sup>3)</sup>」更に、キレーエフスキー兄弟とホミャコフがシェリングの哲学を後スラヴ主義の理論の基底に据えたことも、周知の事実である。

\* \* \*

一般に、上述したとおり、愛智会の会員たちは或程度共通の思想的地盤の上に立っていた。が、かと云って、彼らが一様におなじ思想を持ち、おなじ立場に立っていたと考えるならば、それは大きな誤りであることは云うまでもない。彼らが抱いていた見解にはそれぞれ多少のニュアンス的相違があり、従ってその主張にもそれぞれ特色が見られるのである。

彼らの政治的見解だけをとりあげても、その個人の相違を容易に識別することができる。コシェリョフが《記録》の中で語っているところによれば、1825年12月14日の事件の前夜には彼らの間に反政府的気分が横溢していたとは云うものの、それはデカブリストの革命精神と共通な何ものをも有せず、むしろ極めて穏健なものであったと云うほかはなく、原則的には農奴制と専制にたいする積極的闘争の拒否という性格をおびていたことは否定できない。従って、事実としても、デカブリストの蜂起の鎮圧直後のサークルの解体に際して、「より良き現実への志向」の修正とか「現実尊重」というあたらしいテーゼの宣言と云ったような態度しか示しえなかった。これがこの会の一般的性格であったのである。が併し、このような一般的性格にもかかわらず、数多いメンバーの中には、《ムネモジナ》の監修者の一人であってしかもデカブリストであったキューヘリベッケルを発見することもできるし、また革命運動にこそ加わらなかったけれども思想的にはデカブリストと相隔つること極めて少なかったヴェネヴィーチノフを見出すこともできるのである。

彼らの文学活動の面にもこれとおなじような現象が見うけられる。愛智者の中でロシア文芸批評史の上で最も重要な位置を占めているのは Д.В. ヴェネヴィーチノフと В.К. キューヘリベッケルの二人であって、この二人は、デカブリストのルイレーエフや А. ベストウージェフとおなじように、ロシア独自の文学の創造を呼びかけ、且実践もした詩人たちである。しかも、これら愛智会の批評家たちは独自性あるロシア文学の樹立の方途について具体的に種々配慮するところがあったという点でも、またロマンティシズムの枠から一步踏み出していたという点でも、《北極星》の監修者たちより一步先んじていたと云える。ところが、この二人を更に個別的に観察する時、そこに、おなじく独自性ある国民文学の創造を志していながら、彼らはその主張においてそれぞれまったく違っており、特異性を持っていたことに気づくのである。すなわち、ヴェネヴィーチノフが <sup>リョーフカヤ・ボエージャ</sup> 軽快詩を排して詩の世界へ思想を導入することを唱道したのにたいして、キューヘリベッケルは、アルハイストとして、オードのジャンルの復活を提唱したのであった。

1) См. «История рус. лит. XIX века», под ред. Д.Н. Овсяннико-Куликовского, т. I, стр. 255; Д. Веневитинов, собр. соч., изд. 1862 г., стр. 156.

2) V.V. Zenkovsky, «A history of Russian philosophy», v. I, p. Note 3.

3) *Ibid.*, p. 156.

叙述の順序からすれば、ここで当然この二人の愛智者の所論の詳細な紹介に移るべきところなのであるが、キューヘリベッケルについては他のアルハイストと関連させて説いた方が便利なのでこれを次章に譲ることにして、ここではヴェネヴィーチノフの批評活動だけに限って説くことにしよう。

ヴェネヴィーチノフは 1827 年にわかくして病死しているのでその文筆生活はいたって短かく、従って論文の数もきわめて少ない。にも拘わらず、彼は美学的見解において当代の批評界の水準を遙かに抜いていた。後にチェルヌイシェーフスキーが「雑誌の計画にたいする若干の考察」を読んで、「ヴェネヴィーチノフはあと 10 年生きながらえたとしたら、わが国の文学をまる数十年も前進させたことだろう」と感激の言葉をもらしたというが、それは、彼が既にその批評の鋭さにおいても深さにおいても群を抜いていたばかりでなく、批評界に指導的位置を占むべき素質を十分に備えていたことを保証した言葉である。

「哲学は真の詩である」と云い、B. オドーエフスキー同様、哲学と文学の結合を志したヴェネヴィーチノフは、上記の論文においても、当時流行の思想性のないいわゆる「軽快詩」に反対して、ロシア文学への思想詩の導入を提唱したのであった。論文の筆者の主張を十分に理解するためには、一応その頃までのロシア詩壇の状況を振り返ってみる必要がある。18 世紀以来支配権を握って来たクラッシズムの作品と並んで、ロシアの詩壇には 19 世紀初葉から軽快詩 (p<sup>o</sup>ésie fugitive) なるものが出現し、10 年代の半ば以降には既に流行のジャンルとしてクラッシズムのそれに優に拮抗しうるほどの勢を示した。これは、洗練された上流社会の生活感情を、優雅なエピキュリアニズムを表現し且日常生活を飾ることができるような詩を待望する貴族のインテリゲンツィヤの趣味に応じて発生した、フランスのバルニ、ヴェルジエ、グレクールらを源流とする軽い詩文学の総称である。ポスラーニエ、エエレジー、諷刺詩、<sup>マドリガル</sup>牧歌等がこれに属する。総じて貴族社会の生活現象をそのまま唄いあげる底のものが多かったから、内容的には比較的価値のひくいものが多く、作詩者はその無内容を形式美や詩句の外面的彫琢をもって補うことに努めた結果、ロシア詩の技巧の面のいちじるしい発達をうながした。この技巧の完成ということ以外に、このジャンルの詩は、従来の美学のドグマティズムを破壊して、新生面をひらく上に与って力があつた。即ち、この種の詩を手がけたデルジャーヴィン、B. B. カプニスト、デリヴィク男爵、Bac. Л. プーシキン、ヴァーゼムスキー公爵、特にこの分野で比類ない技倆を發揮したパーテュシコフ、A. C. プーシキンらは、ヴォルテールの「退屈なもの以外はすべてよろしい」という有名なアフォリズムどおり、詩をあらゆる軛から解放して、詩の領域を拡大したのであった。

ヴェネヴィーチノフの「雑誌の計画にたいする若干の考察」は、このような詩壇の詩における内容軽視的な傾向にたいする批判と方向転換の要求として呈示されたものである。哲学者である彼は人間の目的を自己認識におき、文学や芸術を自己認識の手段と考へてこう主張する。「自己認識——これこそ宇宙に魂を吹きこみうる唯一のイデーである。これこそ人間の目的であり、最高の到達点である。」「芸術家が画布や大理石に魂をあたえるのは、自己の感情を具現してその感情の力を確認するためにほかならない。詩人は人工的に自己を自然との戦いの中に、運命との戦いの中に導き入れて、その矛盾撞着の中で自己の精神を試した上で、最後に人智の勝利を誇らかに宣言するのである。」即ち、彼の説によれ

ば、芸術とは人間の精神を鍛えるための自然との一種独得な闘争であると云える。

筆者はここからロシア詩壇にたいする批判に乗りだし、軽快詩の排撃と、自己認識を目ざす思想詩の導入への呼びかけへと移る。彼はまず、「あらゆる民族を通じて、詩人の数がおおいということはその民族が軽薄であることを示すこの上ない確実な証拠である。吾人の見るところでは、史上で詩の最も隆盛であった時代というものは常に、詩人の数が最もすくない時代であった」という一般論から説きおこして、「ロシアはフランスの制縛と無知な自己過信から自己を解放して」「シラーとゲーテの高翔に方向をあたえた高い目的への志向」を範とすべきであると説いた上で、つぎのような美学論を展開する。「最初の感情はけっして創造しないし、創造しえない。なぜなら、それは常に一致調和を呈するからである。その感情は思情を生むだけに留まる。そして、その思想は相せめぎながら発展した時に初めてふたたび感情に転化して作品の中に出現するのである。あらゆる民族の、またあらゆる時代の真の詩人がふかい思想家であり、哲学者であり、いわゆる啓蒙開化の頂天であったのは、そのためである」。

ここでヴェネヴィーチノフの、矛盾の分析は抽象的思弁的領域からふたたびロシアの現実の領域へと移行する。「わが国では詩の言葉がメカニズム化している。それは、自己の感情を把握しておらず、またそれゆえに理性の明確な言葉とは無縁であるところの、無力な道具と化している。わが国では、感情はどうしたことか思考の義務を伴わず、曖昧な娯楽という気楽さではぐらかしてしまい、完成という高遠な目的から逸らせてしまっている。ロシアがこのような精神状態にある時に、ロシアを益することを自己の行動の目的に選ぶ者にとって考える手段はただ一つしかない。それは、現在のロシア文学の歩みを完全に停止させて、ロシア文学を、作るよりもより多く考えるものたらしめることである。」こうして、ヴェネヴィーチノフはロシア文学に思想性を付与することによって、「民族の啓蒙や自覚の目標であるところの」「民族が自己の問題をはっきり掴み得自己の活動範囲を定めうる段階」に達すれば、真の文学は自ずから生れてくると説く。<sup>1)</sup>

このようにロシアの自覚や民族の啓蒙の問題を文学と結びつけて考えていた所に、彼とデカブリズムとの接点があり、ライチ、テュツチェフ、シェヴイリョフ、ホミャコフら、おなじく哲学的叙情詩の創造を志した愛智者たちとの相違点があったわけである。これら愛智者たちの場合は、文学とドイツ観念論との結合が、市民的文学伝統、とくにデカブリストの詩的遺産の再評価と批判を結果し、文学における反動的、反リアリズム的伝統への道を切りひらくこととなったのであった。<sup>2)</sup>

1) 以上のヴェネヴィーチノフの論文からの引用文については、Д. В. Веневитинов, «Сочинения», ч. II, 1831 г., стр. 25-29 参照。

2) 1821 年まで平安同盟 Союз благоденствия に属していたライチは初め市民文学の伝統にそって文学活動を展開したのであるが、1826 年以降は、それ以前からの教訓主義的文学ジャンルの復活の提唱にくわえて、イタリア文学の佳調をとり入れ、演説調の激越な表現をこころざしながら、他面ジューコフスキー文学の神秘主義的ロマンティシズム的傾向への追従を事とする折衷主義的な思想詩的詩人へと変貌していった。20 年代にはまだこのライチの影響下にあつて、二流どころの詩人の域から抜け出ていなかったテュツチェフも、プーシキンのオード《自由》にこたえて、この詩人を暴君の摘発者として歓迎していながら、一方では彼に皇帝の心を「柔らげるべきではあつても、その胸をさわがすべきではない」などと忠告し、また、詩篇《1825 年 12 月 14 日 14 декабря 1825 года》の中では、一方において「独裁」を非難しながら、他方では 14 日の蜂起にたいして批判的な

ヴェネヴィーチノフは、そのような彼らとはちがって、いつまでもシェリングの先験的観念論の枠内にばかり閉じこもってはいなかった。上記の論文によっても知れるとおり、すでに芸術に目的をあたえていたということが、その何よりの証拠である。また、彼は愛智会に属してはいても、他の愛智者たちのように、ロマンティズムしか理解できないのでもなかった。それは、つぎに述べるようにすでに、リアリズムの道を歩みだそうとしていたプーシキンを擁護して、ロマンティズムの評論家にして作家の H. ポレヴォイを相手に一戦をまじえたことから窺えるところである。彼の柔軟な頭脳と自由な判断力は早くもあたらしい価値ある文学作品を識別し評価する力を備えていたのである。ヴェネヴィーチノフの文学活動は、「エヴゲーニー・オネーギン」の第一章にたいする H. ポレヴォイの批評にたいして反論をこころみた論争形式の二つの論文とともに開始されたのであるが、これらの論文がはしなくも彼にとって、プーシキンの作品のみならず、いわゆる「あたらしい」「真のロマンティズム」<sup>1)</sup> の理解のための理論の形成の契機となったのであった。彼は、詩というものはポレヴォイが考えているような「漠然とした頭の熱病」のようなものではなくて、「それ自体の中に自己の法則を有する」ものであると説き、「詩学には積極的な原理がなければならない。いかなる積極的な科学も自己の力を哲学から借りているが、詩も哲学とは密接不離である」<sup>2)</sup> と断ずる。この点は、原理を無視していたルイレーエフとも違っていたところである。が、かと言って、これは既にロマンティズムの理論でもない代りに、古い原理を固執していたクラッシズムのそれでもない。云わばあたらしい文学に対応するあたらしい理論の創造のこころみであった。

プーシキンは自分にたいして透徹した理解をしめしてくれたこのヴェネヴィーチノフの論文に満足したらしく、ヴェネヴィーチノフの弟の伝えたところによれば、彼は、「これはわたくしが愛情と注意をもって読んだ唯一の論文だ。ほかはことごとく悪口雑言かさまなければあまりにもあまい戯言だ」という言葉をもらしたという。これらの論文は更に、プーシキンとヴェネヴィーチノフを接近させたばかりでなく、その結果プーシキンが愛智会

態度をしめしたのであった。また、ライチのサークルと愛智会の影響下に立って、ジッコーフスキーの神秘主義的ロマンティズムの文学を受け入れ、ついでドイツ観念論のとりことなったシェヴィリョフの場合も、これと同様である。オードの諸原理を復活した彼の詩篇からは、シェリングの美学のイデーとエモーションの反映がはっきりと見てとれる。彼はシェリングにならって、自然現象を哲学的に宇宙的精神のシンボルとして開示することをくわだてたのであった。が併し、デカプリストの事件の後においては、自己の詩の原理の発展につれて、彼は、必然的結果として、プーシキンのリアリズムの原理との闘争への道をたどるにいたり、彼の詩は神秘主義的ロマンティズム的な傾向をおびるようになったのである。更に、ホミャコフも、ある点において、シェヴィリョフがたどった道筋とおなじような傾向をたどっている。彼は初め「北極星」などに自作の詩をのせたりなどして、デカプリスト、とくにルイレーエフと親しい交りをむすんだ時期もあったが、ついでその後愛智会のつよい影響を受け、最後の段階では、周知のように、スラヴ主義に到達して、その主要なイデオログとなり理論家となって、ベリンスキーらと矛先をまじえることにもなったのであった。

ところが、ヴェネヴィーチノフは、評論の面においてばかりでなく詩作の面においても、これら愛智者たちとはちがって、いつまでもシェリングの限界内にとどまることなく、またベリンスキーも云っているように、「空想的観念的傾向を」おびずに、「真正の観念的な傾向を」しめしたのである。そして、詩の中に「自動的な発展力を内包する内容を」呈示したのであった。

1) プーシキンは、後にリアリズムとして規定された文学様式に「真のロマンティズム」という用語を与えていた。

2) Д.В. Веневитинов, «Разбор статьи о «Евгении Онегине»», 1825 г., ч. 100, No. 8.

の会員のアリマナッフ発行の計画に助言をあたえることにもなり、1827年に発刊された雑誌《モスクワ通報 Московский вестник》に協力することにもなったのである。<sup>1)</sup> また、プーシキンが1826年の9月にモスクワへ出てきた時には、彼は数回にわたってヴェネヴィーチノフに面会し、ヴェネヴィーチノフの家で《ボリス・ゴドゥノフ》を朗読した際、ヴェネヴィーチノフがこの戯曲にたいして第一級の作品という折紙をつけたということも伝えられている。更に、ヴェネヴィーチノフは《エヴゲーニー・オネーギン》の第二章をもとりあげて、その中でオネーギンをチャイルド・ハロルドと対比して、「オネーギンの性格はまったくわが国の詩人のものであって、独自の発展をとげている」<sup>2)</sup> と評した。この評言は、《オネーギン》の最初の数章にあらわれたバイロンの影響と、その後の主人公の性格並びに作品全体のリアリズム的展開を早くも予見していた言葉として注目に値する。

民族性の問題については、先にオレスト・ソモフの見解を紹介しておいたが、この問題は単にソモフらロマンティシズムの批評家だけが取りあげたものではなくて、この問題の解決は、独自性あるロシア文学の形成過程にあったこの時代のあらゆる文学流派に共通な課題だったのである。ソモフの把握の仕方と比較してみれば立ちどころにわかることではあるが。ヴェネヴィーチノフはこの民族性にかんする解釈においても、当代のロマンティシズムの批評家たちより一歩も二歩も先んじていた。この問題について、《彼はエヴゲーニー・オネーギン》の第一章の評価をめぐって H. ポレヴォイと論争を展開した折にこう述べている。「わたくしは民族性をチェレヴィキ(ウクライナ農婦の靴——筆者注)や顎ひげなどにある(ポレヴォイ氏が聡明にも考えているように)ものとも考えていないし、《電信》の発行者(ポレヴォイ氏——筆者注)が探求するような方面にあるとも思っていない。」そして、彼は、民族性を個々の形象や情景に求めるべきではなくて、「ある民族の精神に徹した詩人の、云わば民族の発展と進歩と個性に生きようとする詩人の、ほかならぬ感情の中に求めるべきである。民族性の概念を民族の習慣と混同してはならない。その種の習慣的な情景が本当にわれわれを満足させてくれるのは、誇りたかい詩人がそれらに正しい関心をしめした場合だけである」<sup>3)</sup> と、独創的な穿った見解をしめしている。この文学における民族性の問題にかんする解釈がいかに卓越したものであったかは、当時の評壇の水準と思いをあわせてみても、またゴーゴリが1832年に論文《プーシキンについて数言 Несколько слов о Пушкине》の中で下している国民性 национальность にたいする定義や、ベリンスキーがその後龐大な論文《アレクサンドル・プーシキンの著作》の中でおこなっている民族性にかんする解釈が、等しくこのヴェネヴィーチノフの考え方を敷衍し発展させたものに過ぎないことを思いあわせてみても、自ずから判断のつくところである。<sup>4)</sup>

1) プーシキンが1826年にモスクワへ出て来て、自分の遠縁に当り且自作に好意的な批評をしてくれたヴェネヴィーチノフに会った時に、彼はもとの愛智会の成員たちが廃刊した《ムネモジナ》に代るべきアリマナッフの刊行にかんする計画を知り、アリマナッフをよして雑誌の形式をとるようにと忠告した。この忠告をいれて雑誌として発刊されたのが《モスクワ通報》である。

2) 《Московский вестник》，1828 г., ч. VII, No. 4, стр. 468-469.

3) Д.В. Веневитинов, «Ответ г. Полевому», Сын отечества, 1825 г., No. 24 (Прибавление).

4) ゴーゴリはその優れた論文《プーシキンについて数言》の中で、「民族性」という言葉を「国民性」という言葉におきかえているという違いはあるが、この問題について次のようにおなじような

## 第四章 後期のアルハイストたち

### 第一節 カターニンを中心とする後期のアルハイストたち

ヴェネヴィーチノフの主張の特色が独自性あるロシア文学を樹立するに当って文学の形式よりも内容を重視して、思想の導入によって内容の充実をはかることを考えていた点にあったとすれば、後期のアルハイストたちの主張の特色は、詩の形式の面を重視して、壮大な題材を盛る詩のジャンルと文学語の改造を目ざしていた点にあったと云うことができる。

ところで、おなじくアルハイストとは云っても、前期のアルハイストと後期のそれとは性格にかなりの懸隔があるので、まずこのことから先に明らかにしておかなければならない。

1825年のデカブリストの事件で逮捕されてシベリヤの要塞監獄にあったキューヘリベッケルが1833年にプーシキンのことを追想して書きのこした、つぎのような記録がのこっている。「思えば、二人は1820年からまったく別々の道をあゆんで来たようである。彼が終始言語純化運動派の信者をもって任じてきた(本心からかどうかは別問題だが)のいたいて、僕はこのとおりに既に12年もシシコフ、カターニン、グリボエードフ、シフマートフの旗のもとでスラヴ語擁護軍の中で働いてきている。」

ところが、現在では、リツェイ時代からギリシャ、ローマの古代文学に明るく、教会スラヴ語や古代ロシア語につよい関心をしめしていたキューヘリベッケルが古語にたいする愛という外面的な類似から彼がこのようにカターニン、グリボエードフら(自分をもふくめて)の線を直接シシコフの《懇話会》の延長と見たのは誤りであるとするのが、今日の

---

解釈を下している。「……真の国民性はサラファンの描写にあるのではなくて、民族のほかならぬ精神にある。詩人は、まったく無関係な世界を描いている場合でも国民的でありうる。が、その場合、詩人はその世界を自己の国民的な自然的不可抗力の目で見ているのであり、同国人に自分たち自身が感じたり語ったりしていると思われるように、詩人が感じたり語ったりしているのである。」云いかえれば、詩人が国民性を描くための秘訣は自己の精神が国民の精神と一体になることであるというわけで、民族性は民族の精神に徹した詩人の感情の中にあるとするヴェネヴィーチノフの考え方とまったく一致している。

更に、ベリンスキーは《アレクサンドル・プーシキンの著作》の第六論文の中で民族性についてつぎのように論じている。「われわれは、わが国の文学の擬古典主義的流派が文学作品に上流社会と教養階級の間だけ登場させて、たとえ時には叙事詩やドラマや牧歌の中に一般庶民を登場させることがあっても、利口そうな、髪をちゃんとくしけずり着物を着かざった、自分たちのでないような言葉で話をする平民といった形でなければ登場させることのなかった、仕合せだった時代からはもう既に遠い。そうだ、われわれはあの擬古典主義の時代からは遠いのだ。だが、われわれはまた、「民族性」という言葉と、叙事詩やドラマにひくい階級の正直な人間ばかりでなく、泥棒やかたりまで登場させる権利に有頂天になって、真の国民性はジブーン(農夫の上っ張り)やかまどに煙出しのない百姓家の中にひそんでいる……などと考えて、教養ある人間の中に何か民族性らしいものの兆しでも探しとめることは不可能であると考えていたロマンティシズムの流派からも既に離れるべき時だ。ところが、逆に、ロシアの詩人は教養階級の生活を自分の作品の中に描くだけでも、自分が真に国民的な詩人であることを示すことができるのだ。だが、以前にはなかった様式で半ば隠されている生活の中に国民的要素を発見するためには、詩人は大なる才能を持つことが必要であり、魂が国民的であることが必要である。」彼はこう説いて、そのあとに上記のゴゴリの言葉をそっくりそのまま引用している。

このような訳で、これら三者の間には思想的な継承関係がはっきりと見られるのである。

研究家の一致した意見である。<sup>1)</sup> これには十分な論拠がある。キューヘリベッケル自身、1824-5年頃にはこの二つのグループをはっきりと区別して見ていたということが、執筆以来100年を経過して日の目を見た、1923年出版のトマシェーフスキー編《文学的ポートフォリオ литературные портфели》収録のキューヘリベッケルの論文《1824年のロシア文学概観 Обзорение российской словесности 1824 года》によって明らかにされている。それには「ドイツ的ロシア人とロシア的フランス人は自分たちの内輪揉めをやめて、結束してスラヴ人に当ろうとしている。しかも、このスラヴ人がまた自分たちの古典主義者と浪漫主義者を持っているのである。前者にはシシコフやシフマートフを数えることができ、後者にはカテーニン、[グリボエードフ]、シャホフスコイ、キューヘリベッケルを数えることができる」とある。ここでドイツ的ロシア人 Герmano-Руссы とはロマンティズムの人たちを指し、ロシア的フランス人 Русские французы とはクラッシズムの人たちを指し、スラヴ人 Славяне とは後にアルハイストと名づけられるにいたった人たちを指していることは勿論である。

ところで、この引用文の中で、注目すべき点が二つある。その一つは、云うまでもなく、キューヘリベッケルがシシコフら前期のアルハイストたち（トウイニャーノフのいわゆる「年長のアルハイスト старшие архаисты」）と、カテーニン、シャホフスコイ、キューヘリベッケルら後期のアルハイストたち（トウイニャーノフのいわゆる「年少のアルハイスト младшие архаисты」）とを、古典主義者と浪漫主義者という用語で峻別していることである。彼がこのように前期のアルハイストを古典主義者と名づけたのは、彼ら個人間に見解の点で多少のニューアンス的な差はあるにせよ、彼らは大体において基本的にはロモノソフの三文体説における高低の二文体を固執していたばかりでなく、その固執のしかたがいわゆる逆コース的であり、単なる固執のための固執であって、クラッシズムの批評家同様文学の革新など考えようともしていなかったからである。それゆえ、例えば、シシコフがアルザマス派との論争に際して言語の問題に信仰や道德の問題までからませて、当時無信論者は革命家と見られていたのをよいことにして、敵方が教会の儀式に参列しない点を非難するような挙にまで出たことも、何ら異とするに足らない。<sup>2)</sup> これに反して、キューヘリベッケルが浪漫主義者と名づけた後期のアルハイストたちは、おなじく教会スラヴ語と古代ロシア語を尊重したとは云え、またクラッシズム的な詩の様式の復活をこころみ、古語以外に民衆の言葉や伝説をも利用したとは云え、それは、外国文学の模倣を排して、より民族的な、独自性あるあたらしい文学を創造するための手段にすぎなかった。

1) См. В.Г. Базанов, «Поэты-декабристы», стр. 116-117; АНС, «История русской литературы», т. VI, стр. 96 (Н.И. Мордовченко, гл. VII, «Кюхельбекер»); там же, стр. 125-127 (Н.К. Пиксанов, «Грибоедов»); «Пушкин в мировой литературе», стр. 216-218 (Ю. Тынянов «Архаисты и Пушкин»).

2) この前期のアルハイストの性格づけは、勿論、生粋のシシコヴィストたちを主体として見た、大掴みなものである。前期のアルハイストの中で中心的な存在であったデルジャーヴィンは暫らくおくとしても、クルイロフなどは愛国主義的であり、奴隸的な外国崇拜にたいして批判的ではあっても、決して反動的な存在ではなかった。シャホフスコイ（キューヘリベッケルは後期のアルハイストに入れているけれども、正しくは前期に属させるべきである）も、ロマンティズム的傾向を持っていたことは第一章で述べたところである。また初めは懇話会の会員で後にアルザマスに転じたグネーヂチもシシコフと同列において論ずるわけにはいかない。

そして、前期のアルハイストが概ね反動的であったのに対して、後期のアルハイストは、カテーニン、グリボエードフのようにラヂカルであるか、キューヘリベッケルのように革命的であった。このほか、ジャンドル、ズイコフ、バフチンら二流所の後期のアルハイストにしても、バフチンを除いて、皆デカブリストの運動に多少とも関係を持っていた。これらの客観的な相違点を抜きにして考えれば、キューヘリベッケルが自分たちを浪漫主義者と称したのは、彼の浪漫主義の理解のしかたが一般の通念とちがっていたことにもよるのである。彼はジウコーフスキーなどをロマンティシズムの詩人とは考えず、カテーニンこそ真の浪漫主義者であると考えていた。そこに彼の解釈の特異性がある。たとえば、彼は1825年にこう書いている。「わが国には(少数ではあるが)大胆な空想力を持ち、響こそよいが内容の空疎な修飾語の水などで薄めてない言葉を持つ詩人がいたし、現在もいる。デルジャーヴィンについては、もはや云うまい。が、例えば、カテーニンなども幾つかの自作の軽い詩における限りそう云った詩人に属する。《ムスチスラフ》や《殺人者》や《ナターシャ》や《森の精》のような彼のバラードはまだ試みにすぎないけれども、(わが国のまったく情熱のないまったく用心ぶかい、まったくロマンティシズム的でない自称浪漫主義者たちよ、立腹されることのないように!) 恐らく、わが国の文学の中でこれらのバラードにおいてほかにロマンティシズムの文学に属しうるものはあるまい。」これは、単にバラードがロマンティシズムの一ジャンルであるということとは別に、ロマンティシズムの必須条件としてキューヘリベッケルが考えていたのは民族的な題材と民族的な表現手段を有し、且現実に忠実であるということであったことを物語っている。このようなロマンティシズムにたいする見解をもっていたのはひとりキューヘリベッケルだけにとどまらない。たとえば、カテーニンの代弁者であったバフチンも、「真のロマンティシズム」の真随は、読者があらかじめ他の民族の風習や信仰や気候を研究せずとも理解できるような色彩を利用し国民的な題材を選ぶことにある、と書いている。また、カテーニンも、ロマンティシズムの問題を解決するにあたって、その問題を芸術の民族性とか独自の国民的な詩的文体の確立の問題とむすびつけて考え、いかなる場合にも「自己の、祖国の、民族的な文学」を優位においていた。ともかく、後期のアルハイストには以上のような特色があったのである。これが、注目すべき第一の点である。

第二の点は、キューヘリベッケルがこれを書いた頃、つまり1824-5年頃には、クラッシシズムの流派とロマンティシズムのそれとの論争が後景に退いて、スラヴ人、つまりアルハイストとロマンティシズムの流派との論争が前面に大きく浮びあがってきたという事実である。キューヘリベッケルが指摘したこの事実は、さきにわたくしが、1824-5年頃にはクラッシシズムの批評家のロマンティシズムへの偏向や変貌が露わになってきて、純然たるクラッシシズムの批評家としてとどまる者が見られなくなってきたと述べておいたことと符節をあわせている。これは取りもなおさず、この頃には既にクラッシシズムが拮抗しうる勢力としてロマンティシズムと争えるだけの力も意味も失ってきていたことを示すものであるが、これに反して、後期のアルハイストたちは新文学創造の運動においてロマンティシズムの陣営と轡をならべて競いあえるだけのエヴォリューションをとげており、従ってそれだけの実力も備えていた。ここに、ロマンティシズムの批評家相手の論争の当事者の交替の原因がひそんでいたわけである。

前掲の引用文の中でキューヘリベッケルはアルハイストの対ロマンティズム論争として 1824 年の論戦だけを問題にしているが、前期のアルハイストの《懇話会》とアルザマスとの戦いは別として、後期のアルハイストとロマンティズムの流派との論争だけに限っても、それはまだ一例にすぎない。早くも 1815-16 年に、すなわちアルザマスの結成の年から、ジューコーフスキーを敵としてのアルハイストの烈しい挑戦が見られ、この時には攻撃の火蓋を切ったのは前期のアルハイストのシャホフスコイであったが、ジューコーフスキーのバラードにたいする攻撃とカテーニンのバラードをめぐる論争によって戦いの本当の意味と理由を明らかにしたのは後期のアルハイストのカテーニンとグリボエードフだったのである。そのほかに、1822 年にはグレーチの《簡略ロシア文学史試論》を契機としてオクターヴァをめぐるカテーニン、バフチン対 A. ベストウージェフ、グレーチ、ソモフの論争も展開されている。要するに、1825 年までの後期アルハイストの出撃としては、以上 3 つの論争がその主要なものであったわけである。

では次に、順を追ってこれら 3 つの論争について解説していくことにしよう。

カラムジン、ジューコーフスキーら新傾向の文学にたいする後期アルハイストの最初の攻撃がおこなわれたのは 1816 年である。が併し、その前年のシャホフスコイの《レペック鉱泉 Лепецкие воды》による出撃がその前哨戦の役割を演じたのであった。即ち、まず彼がこの作品の中でバラード詩人フィアールキンの形象に仮託してジューコーフスキーのセンチメンタリズム的傾向を揶揄したことが切っ掛けとなったのである。そして、この両者間の戦いは、翌年の、ジューコーフスキーの《レノーラ》とカテーニンの《オリガ》をめぐる論争によって俄然白熱化するにいたった。もともと、《オリガ》という作品は、かねがねジューコーフスキーのサロンのロマンティズムの美学といわゆる「滑らかな」言語や文体に不満を抱いていたカテーニンが、ジューコーフスキーの外国の材料によるバラード《リュドミーラ》とはちがって現実を正確に描写し「庶民性」と民衆の言葉を導入したロシア的なバラードの見本を呈示しようという意図のもとに書いたものである。そのような訳で、この作品は、《ナターシャ》、《森の精》等のカテーニンのバラード全体についても云えることであるが、ロシアの生活の実体に忠実で、筋も自然であり、文体も「荒けずり」で「俗語的」な性格を備えている。後に、即ち 1833 年に、プーシキンはこの二人のバラードを比較して、カテーニンの《オリガ》を「非凡な作品」という言葉で褒め、《リュドミーラ》を「原型の精神と形式をよわめた」「不正確な、うつくしい模倣作」と決めつけた上で、「カテーニンはこれ(この欠点——筆者)を感じたので、原作の力づよい美しさそのままのレオノーラをわれわれに示そうと思いたって、《オリガ》を書いたのである。ところが、その表現の素朴さというよりも粗けずりな点や、飄々たる亡霊の群にとって代った悪党の群や、夏の月に照らされた田園の風景とは打って変わった絞首台が馴れない読者に不快な驚きをあたえ、その結果、その読者の意見をグネーデッチが論文の中で代弁する役をひき受けることになり、更にその論文の見解が当を得ていないことがグリボエードフによって明らかにされるようなことにもなったのである」と、この論争の経緯を素描している。この時、グネーデッチがカテーニンの文体の、「詩的でない」素朴さとか、趣味と理性にたいする侮辱」とか、「論理や文法」の間違いとか、散文性と云ったような特殊性を非難して、ジューコーフスキーは「ドイツの民族的なバラードのレオノーラをロシア人に不快に感じさせな

い方法は模倣以外にないことを知っていたのだ」と、彼の反訳の原理を擁護したのにたいして、グリボエドフはアルハイストの「中位の」文体の主要な特殊性を強調し弁護して、「彼(批評家——筆者)は大体、素朴さにたいする不倶戴天の敵なのだ……」と決めつけ、ジュコーフスキーの《リュドミーラ》のスタイルの「滑らかさ」と唯美主義を攻撃して、「リュドミーラ」の言葉を十分に吟味してみればわかることだが、それらはほとんど皆無邪気さと温順さで生きているのである。それなのに、何のために彼女にあのようなむごい罰を加えなければならないのか?」「その亡霊はあまりにも愛らしい。生きている人間でもあれほどかわいいものではない」などと皮肉ったのであった。そして、当代の観念的な愛を夢みる風潮については、「夢想家など、どうとでもなるがいい。こんにちでは、どういう本を覗こうと、民謡だろうが、ポスラーニエだろうが、何を読もうと、どんな本にもあるのは夢想だけであって、自然らしいものなど毛ほどもありはしない」と、慨嘆している。これがカラムジンやジュコーフスキーやその追従者たちの傾向にたいする非難であることは言うまでもない。

ところで、このカテーニンとジュコーフスキーのバラードをめぐる論争はこれだけで終わったのではない。それは 20 年代までも尾をひいて、1823 年に再燃するのである。但し、このたびは論争の主役が交替して、A. ベストウージェフとバフチンが取りくむことになる。バフチンは、ロシアの民話に取材したカテーニンのバラードにたいするベストウージェフの攻撃を受けて立って、「カテーニン氏は、われわれが民話で聞きなれている怪奇さを、つまりわれわれの目にバラードが作者の馬鹿げた思いつきに見えないために是非とも必要な特質を、わたくしの知っているかぎりのロシアのバラードの中ではかなり珍しい特質をもつバラードを作ろうと思いたったのだ」と、カテーニンのために弁じている。(傍点の箇所がジュコーフスキーにたいする当てこすりであることは言うまでもない。)バフチンはここではカテーニンが構想にまでロシア的性格を付与しようとした点を擁護しているのであるが、カテーニンの他のバラード《殺人者》については、取りわけその写実性を賞揚している。彼は「《殺人者》の内容は、おそらく、実際の事件から取材されたものであろう……」とも云い、「この歌の意味は、シラーから反訳されたジュコーフスキーのバラード《イービュコスの鶴 Ивиковы Журавли》を思いおこさせる。あの中では鶴が、ここでは月が殺人者の発見に役だっている。しかし、後者の方がわれわれには身近かな感じがする。《殺人者》には農民のあらゆる生活が見られる。すべてが作者の語るとおりであったことは疑えない」<sup>1)</sup>とも書いている。このあと、1825 年には、キューヘリベッケルが論文の中でカテーニンのバラードを弁護して、この詩人を真のロマンティズムの詩人と称したことは、前述のとおりである。

このようなジュコーフスキーにたいする非難攻撃は、アルハイストだけがこころみたことではなかった。彼にたいする非難は 20 年代の文壇を掩った広範な現象であって、彼はスタイルやテーマや抒情詩のジャンルの中で味方の者までも満足させることができなかったのである。たとえば、ヴァーゼムスキーは彼のテーマのマンネリズムに業を煮やして、

1) «Вестник Европы», 1823 г., No. 3 и 4, «О стихотворениях Катенина», стр. 201, 203, 206.

こう書いている。「ジューコーフスキーは既にあまりにも神秘主義化している。彼はあまりにもしばしば欺瞞にふけてはならないはずなのに。あのまやかしの蔭には思想の光などひそんではない。……彼はあまりにも一つ歌をくり返しすぎるので、文学の神秘主義を有りがたがるわたくしでさえ既に飽きだしている……詩人というものは自分の魂をさまざまな器に注ぐべきだ。ジューコーフスキーは他人よりも千変一律を自戒しなければならない。」<sup>1)</sup> また、プーシキンもジューコーフスキーの作品の反諷的性格に焦燥を感じて、1822年に「もう彼も自分自身の想像力とたくましい構想力を持ってもよい頃だ」、「どうか、彼には創作をはじめてもらいたいものだ」などと書いている。のみならず、1824年にジューコーフスキーの詩集が出た時には、彼はこれに冷評以下の批評さえ加えたほどである。<sup>2)</sup> そのほか、1825年には《祖国の子》に、つぎのような、ジューコーフスキーに厳しい批判を加えた書簡が掲載されたこともあった。「この詩人の作品はほとんどすべて、必ずしも原作にちかいは限らない反諷や、かなり巧みな模倣作から成っていて、自分のものはきわめて少ないのです……ジューコーフスキーは現代の第一級の詩人ではありません……かつてわが国の大衆がシラー、ゲーテ、ビュルガーらドイツのロマンティシズムの詩人のことをあまり耳にしたことのない時代もありました、が、今日では何もかも知れわたっています。われわれは、何から取ってきたのか、もとは何であったか、何を換骨脱胎したものか、みな知っています。以前には、ジューコーフスキーの文学は何かしら透明な明るい霧につつまれて見えました。が併し、何ごとにも時というものがあるものです。その霧も今では暗胆たるものになってしまっています」<sup>3)</sup>

このように、1820年代に入ってから、敵のみならず味方までがこの詩人に不満をおぼえてきていたということは、理由のないことではない。それは、この頃既に外国の「既成の」テーマとジャンルの輸入の時期がおわっていて、ロマンティシズムの流派の側も、アルハイストの側も、既にロシア独自の新文学の形成のためのあたらしいジャンルとスタイルの探求の段階に入っていたことを物語るものと見るべきであろう。そう考えれば、プーシキンにしても、カテーニンにしても、この運動における急先鋒であったことを思いあわせることによって、ジューコーフスキーにたいする彼らの不満や焦燥のよって来った原因がどこにあったかも、自ずから明らかとなろう。その不満は、独自性あるロシア文学の創造を期待する者も、志す者もひとしく抱いた感情であった。

1822, 23年におこなわれた、グレーチの《簡略ロシア文学史試論》をめぐっての、カテーニン、ジャンドル、バフチン、A. ベストウージェフ、グレーチらの間の論争は、アルハイストの、とくにカテーニンのアルハイズムの志向がどのような性質のものであったかを具体的にはっきりと示してくれている。カテーニンはまず、現代文学もロモノソフが設定した、「ロシア語をスラヴ語に近づける」ような方向をとるべきであると主張して、つぎのように説く。「仕合せにも彼がこのように敷設してくれた道からわれわれは外れてよいものであろうか？ 彼の跡にしたがって、あらたな努力をいたすことによってわれわれの始原

1) «Остафьевский Архив», т. II, стр. 305-6; письмо от 5/IX 1819 г.

2) Там же, т. T, стр. 122, 125.

3) «Сын Отечества», 1825 г., No. 2, стр. 202, 204, 205, Ж.К. «Письма на Кавказ».

的言語にひそむあたらしい富を開発すべきではなからうか。」<sup>1)</sup>そして、カテーニンの場合、この志向が単なる骨董趣味や好事的趣味ではなくて、当時まだ存在していなかったところの、大規模な詩作品を盛るための形式の創造の努力であったことは、つぎの言葉から一層明瞭となってくる。「わたくしは、ヴァリャーグ人的ロシア人らスラヴ主義者<sup>2)</sup>が新流派の嘲笑をあびるだろうということは承知している。が、そのような場合わたくしは好んで訊くのだが、それなら、史詩にしても、悲劇にしても、ありとあらゆる壮重にして高尚な散文にしても、いったいどんな言葉で書いたらよいのか？人も云うように、軽い文体というものは、スラヴ語を混えなくとも立派なものである。それはそうにちがいないとしても、その軽い文体にどんな文学作品でも収まるといえるものでもあるまい。それどころか、軽い文体は文学の中で最上位を占めることさえできないのだ。その種の文体には本質的な価値があるのではなくて、言葉の飾りや見ばのよさがあるだけである。このようにして今では、この軽いもののみをよしとする傾向が高じて、詩作者（散文の時代はまだ来ていない）の数こそふえたけれども、作品の数が減少するというような結果まで生じている……そして、ほとんどすべての批評家が、それに追従して大部分の大衆までが……うつくしいが下らない作品に有害な賞讃を惜しまず、それによって彼らに孜々として撓まぬ精進をやめさせることにもなっている……」カテーニンは次いで、この詩壇の悲しむべき現状の打開の道を先人の足跡にもとめて、「わが国の昔の作家たちを現代の作家と比較してみるがよい。彼らは大なる困難とたたかって来た。各人各様に言葉を創造しなければならなかったからである。ここで序でながら一言しておくが、ふるいものをしっかり掴んでいた者は廃れることが少なかったのである」と説き、「こうして彼らの失敗までが今なお後継者に役立ちうるというのに、現在その後継者がいないのである」<sup>3)</sup>と現状を嘆いてもいる。

このように、カテーニンのアルハイズムにたいする好尚は文学語の創造と、詩文学のいわゆる「高い」ジャンルの創造を目的とするものであった。彼が《祖国の子》の次号に「高い」史詩の詩節として5脚ヤンプのオクターヴァを使用することを提唱する《発行者への書簡 Письмо к издателю》を發表したことがその意図を明瞭に示している。それは、云わば、彼の史詩の形式の創造の第一歩であった。彼は《書簡》に自作のオクターヴァの見本を添えて、「アレクサンドリン句格の詩は情熱の表現にとくに適していて、朗読にもっとも便利であるという長所を持っています……が、これにはやはり避けえない欠点もあります。それは単調な点です。そんな訳で、この句格は史詩のような長い作品にはほとんど向かないのです……一般に、わたくしはアレクサンドリン句格の詩句の史詩で読んで快いものがあるかどうか疑うものです」<sup>4)</sup>と、アレクサンドリン句格の詩句に反対して、男性脚韻と女性脚韻の特殊な交替をとまう、5脚ヤンプの詩句から成るオクターヴァを推奨している。

この意見に反対したのはオレスト・ソモフである。彼は、カテーニンのオクターヴァの

1) 《Сын Отечества》, 1822 г., ч. 76, No. 13, стр. 249-61.

2) カテーニンはここで *славянофил* という言葉を用いているが、これが後に思想史に現れる *славянофил* とは別物であることは、説明の必要もあるまい。

3) 《Сын Отечества》, 1822 г., ч. 76, No. 13, стр. 249-61.

4) 《Сын Отечества》, 1822 г., No. 14, стр. 303 и др.

失敗は「5 脚ヤンプの詩句がみじかくてオクターヴァの容量が小さく」、「韻律があまりにもみじかくてエピック的叙事詩の壮大さに適合していない」ことによるのだと答えて、成功の実例としてジウコーフスキーのオクターヴァを呈示した。そして、これにたいして更に、1828 年にはバフチンがソモフの説を反駁してカテーニン説を弁護している。<sup>1)</sup>

次いで、作詩法一般とアルハイズムとの関係にかんするカテーニンの見解と立場が一層はっきりした形をとって現れたのは、グレーチの著書をめぐる論争においてである。この際、彼は大がかりな詩形式と大規模なジャンルの確立のためにアルハイズムの導入を図るにあたって、高い文体の歴史言語学的基礎づけを回避して、もっぱら教会スラヴ語の機能的な意義だけを問題にしたのであった。この場合、彼が既に 10 年も前にダシコフによって誤謬を指摘されている、教会スラヴ語をロシア語のふるい形とするシシコフの説を踏襲することなく、問題をもっぱら文学の領域へうつして、作詩法におけるアルハイズムの実用という面だけにかぎったところに、彼と前期のアルハイストのシシコフとの相違点があったし、同時に彼の前進性もあったものと考えられる。

カテーニンはグレーチの著書にかんする評論の中にこう書いている。「わたくしはあなたの方がそれ(ロシア語——筆者)をスラヴ語から区別しておられるからと云って、あなた方と議論をするつもりはない。が、ではロシア語はというと、最初にこれを純化し現在のそれに近いものにしたのは、ロモノソフである。それならば、彼はどんな方法で自分の目的を達したのか？それはロシア語をスラヴ語と教会語に近づけることによってである。」このように、カテーニンは文学語の組成の問題をロシア語と教会スラヴ語が同一であるか否かの問題からひき離して、ロモノソフの方法に準拠して、文学語のスタイルをジャンルに応じて変えることを主張する。「わたくしは決して、何でもつねに同一の言葉で書くことを要求するものではない。逆に、作品の種類によって、否、それどころか、個々の作品によって内容にふさわしい特別な文体が必要であると説くものである……喜劇や民話にはスラヴ語の入りこむ余地はない。」

これに対して、グレーチと A. ベストウージェフはこのようなロモノソフ的原理を拒否して、「カテーニン氏の意見に準ずることなく、軽い文体は荘重な作品にも用いられなければならない」と主張して、ジャンル別にちがったスタイルを使用することに反対したのであった。

カテーニンを中心とする後期アルハイストの主張は、大略、以上のようなものである。これらの主張は、カテーニン自身の手で詩作の面において実践されもしたが、文学史的に見て一層重要なことは、その説がプーシキンやレールモントフやネクラソフによって受け入れられ、実際に応用されて、ロシア詩の形式の領域が拡大されるにいたったことであ

1) このカテーニンのオクターヴァとアレクサンドリン句格の詩句との対置は、プーシキンのオクターヴァ形式の《コロムナの家》にその反映を見せている。ここでは、トゥイニャーノフも指摘しているように、オクターヴァの構造がカテーニンが主張したものと一致している。カテーニンの原理の一つは、男性脚韻と女性脚韻の交替である。ところが、ソモフが見本にしめたジウコーフスキーのオクターヴァではオクターヴァの最後の二つの詩句が女性脚韻で、更につぎのオクターヴァの最初の詩句も女性脚韻となっていて、この点がカテーニンによって、「感覚のよい耳をもつ者なら誰でもこのような脚韻の組合せの不一致がどれほど耳ざわりであるか、気づくことだろう」と批判されたところである。プーシキンも《コロムナの家》ではこの不一致を避けている。

る。カテーニンら後期のアルハイストの評論の意義はまさしくこの点にあったと云うべきであろう。

## 第二節 キューヘリベッケル

B. K. キューヘリベッケルは、その人間としての性格の奇矯さは別としても、批評家としてもすこぶる変った存在であった。革命家ではあっても、文学観の点では A. ベストゥーージェフやルイレーエフら他のデカブリストと見解をおなじくしていたわけでもなく、また愛智会のメンバーで《ムネモジナ》の監修者ではあっても、B. オドエーフスキーのようにドイツ観念論だけに執っていたわけでもなく、おなじくアルハイストでありカテーニンの後継者ではあっても、バフチンのように、師の代弁者というだけで独自の主張を持たないというのでもなかった。彼の所説は極めて独創的で、特異性をもったものであったのである。

ところで、彼が、現在われわれが擱んでいるような詩人としての、また評論家としての姿をとるようになったのは、彼が 1822 年にコーカサスでグリボエードフと邂逅した時からであり、この邂逅が彼の文学観や政治的見解の決定的な転機となったとするのが、今日の研究家の定説である。<sup>1)</sup> その変化については、当時の彼の親友たちもはっきりと認めている。たとえば、デリヴィクは自分たちの陣営から離れていったこのリツェイの同窓生の身を案じて、「おお！キューヘリベッケルよ！ここ 2,3 年間の君の変りようはどうだ……それも仕方がない。グリボエードフが君を誘惑したのだから、罪は彼にあるのだから！彼とシフマートフに呪いを書きたまえ、ただしこの頃の詩句をもちいずに、以前のような詩句を使って」と書いている。また、トゥマンスキーもその一年後にキューヘリベッケルに手紙でこう忠告している。「どうして君はそんなにシフマートフや聖書などを読むのだ。前者はヤングのカリカチュアだし、後者はうつくしい箇所が無数にあるにも拘わらず、ミューズたちを教会の聖歌隊に変えてしまいかねない。どういう悪魔がグリボエードフの姿などを借りて、君をいちどきに真の文学の楽しみからも君の最初からの親友からも遠ざけるようなことをしているのだろうか？」

キューヘリベッケルが後の《智慧ゆえの悲しみ》の作者に出遇ったのは、彼が 1820 年に侍従の A. Д. ナルイシキンに随行してヨーロッパ旅行に出、パリーのロシア文学の公開講座でこころみた講演がロシアの使節の不興を買って帰国を命ぜられてロシアへ帰った後、1822 年に A. И. トゥルゲーネフの肝煎りで、当時コーカサスで土族討伐戦の総指揮官をしていた A. П. エルモーロフ將軍のもとに職を得てその地へ赴任した時のことである。グリボエードフの方はちょうどその頃、ペルシャでロシアの外交使節の秘書官として活躍して帰国の途上、一時チフリスに足をとめていたのであった。そして、ここで二人が親交をふかめ、文学観をわからあううち、キューヘリベッケルがグリボエードフの感化をうけるにいたったとされているのである。

ではそれならば、この時、キューヘリベッケルの精神にどのような変化が起ったのか？

1) См. АНС, «История русской литературы», т. VI, 1953 г., стр. 94, (Н.И. Мордовченко, гл. VII «Кюхельбекер»; там же, стр. 131-132, (Н.К. Пиксанов, «Грибоедов»); «Пушкин в мировой литературе», 1926 г., стр. 270 (Ю. Тынянов, «Архансты и Пушкин»).

このことについて、その大体を、邂逅以前の彼の文学観とその後のそれとを比較することによって、具体的にさぐってみることにしよう。

Н.И. モルドフチェンコは、この時のグリボエードフの影響によるキューヘリベッケルの文学観の変容について、こう書いている。「キューヘリベッケルはグリボエードフの助けによって自由の予言者としての闘士としての詩人の役割と使命の認識に到達した。彼はグリボエードフの影響のもとにロシヤ文学のセンチメンタル的エレジー的傾向を批判的に再評価し、ジューコフスキーにたいする自分の態度を再検討した。キューヘリベッケルはジューコフスキーの模倣者や弟子の位置から脱して、ジューコフスキーを首領とする流派にたいして反対の立場をとるにいたったのである。」<sup>1)</sup> キューヘリベッケルがグリボエードフと交わる前には彼はジューコフスキーの「模倣者」であり「弟子」であったというこのモルドフチェンコの断定的な規定にはいささか誇張がふくまれている嫌いがないでもない。それは、彼はその頃クラッシシズムに反対して新しい流派を擁護する態度を示していたことも事実だし、新興のドイツ文学とその流れを汲むジューコフスキーに共鳴していたことも事実ではあるが、彼の詩作品に目を通す時、そこには、例えば《詩人 Поэты》のように「大衆」から理解されない「勇しくも神聖な歌い手たち」の悲劇的な運命にたいする痛憤の声や、迫害の中にありながらも「自由で歓喜と誇りに満ちた」「詩人たちの同盟」の強調等、デカブリストの詩人としての特色も遺憾なく出ているからである。しかし、邂逅以前には彼はまだジューコフスキーの流派と自分との間に劃然たる境界線をおいていなかったことも確かである。たとえば、1817年の彼の論文《ロシヤ文学の現状にたいする瞥見 Coup d'oeil sur l'état actuel de la littérature russe》からもそれを看取することができる。彼はその中でロシヤ文学の変革 (révolution) について語っているが、その際彼はジューコフスキーがもたらした「ドイツの変革をその種の変革の流れの一つと見て、これを擁護する一方、「19世紀以前にわが国の文学を支配していた、フランス文学の諸々の原則に立脚した文学論」に反対している。そして、彼はあたらしい文学について論ずるにあたってまず、「これまで重んぜられていなかった」ドイツ文学について歓喜をもって語っているヴォストーコフの《抒情的文学のこころみ Опыты лирической поэзии》を真先にとりあげ、そのあとでヴォストーコフの後継者のグネーヂッチとジューコフスキーについて述べているのである。

ところが、その3年後には彼はこの「恥ずべきドイツの鎖をふり切って」独自性を獲得することを呼びかけている。その好例は《ムネモジナ》所載の彼の論文《最近10年間のわが国の詩文学、とくに抒情詩の傾向について》の中の一節である。彼はその中でジューコフスキー一派の、ロシヤ詩壇を支配していたエレジー的傾向にたいして、「われわれはみな競って、自分の亡びさった青春を哀惜し、その哀愁を咀嚼し、反芻してとどまるところを知らない」と厳しい批判を加え、古来のロシヤ文学の独自性と自由へ復帰することを唱道して、「ジューコフスキーがわれわれをフランス文学の軛とラアルプのリセーやバトゥーアの講座の法則によるわれわれにたいする支配から解放してくれた点ではわれわれは感謝

1) АНС, «История русской литературы», т. VI, 1953 г., стр. 94 (Н.И. Мордовченко, гл. VII «Кюхельбекер»).

する。が併し、彼にたいしても他の何びとにたいしても、たとえその人が彼よりも十倍も大きな才能をもってしようと、われわれにドイツやイギリスの支配の枷をはめることは許さないだろう！民族文学を持つことが最善である」と書いている。これが、邂逅以後の彼の文学観の変貌の一つである。

つぎに、外国の古今の文豪たちにたいするキューヘリベッケルの評価におよぼしたグリボエードフの影響について考察しよう。

H. K. ピクサーノフはグリボエードフにかんする論文の中で、「グリボエードフはバイロンをチフリスでキューヘリベッケルと一緒に研究したと考えるのがもっとも妥当な見方であろう。既にバイロンが盛んに反訳されていたパリーからキューヘリベッケルがこの英国の詩人にかんする報知をもたらさないわけはなかった」と書いている。事実この頃キューヘリベッケルがバイロンに大変な熱をあげていたことは、「わたくしの仲間の詩人のなかで誰ひとりわたくしよりもバイロン熱に浮かされた者はいなかったろう」<sup>2)</sup> という彼自身の手紙の一節によって証明できるところである。そして、その熱をさましたのがグリボエードフであったことも、「グリボエードフはこの点でもわたくしに実に大きな利益をもたらしてくれました。彼はわたくしにそういったことがみなどんなに滑稽なことか、どんなに真の男子にふさわしからぬことかということを感じさせてくれたのです」<sup>3)</sup> というような手紙の文面から、察しがつくのである。そしてまた、この影響が彼に前記の論文の中でバイロンを「一面的なバイロン」などと呼ばせることにもなったのである。

彼はバイロンばかりでなく他の外国の詩人たちにも、つぎのような当時の常識とはおよそかけ離れた評価を下している。「人は通常、ギリシャ文学とラテン文学を、英文学と独文学を、偉大なゲーテと未熟なシラーを、巨人中の巨人であるホメロスとその弟子のヴィルギリウスを、きらびやかで声たかきピンダロスと散文的な作詩者ホラーチウスを、古代の悲劇作家たちの後継者の名にあたいするラシーヌと真の文学から縁どおいヴォルテールを、巨大なシェクスピアと一面的なバイロンを同列においている。」<sup>4)</sup> 彼が古今の詩人たちにたいして定めたこのような序列、とくにバイロンに下した低い評価は、ロマンティズム華やかなりし当時の文学者や読者を瞠目させるに十分であったろうということは、察するに難くない。

これよりもなお一層彼らに奇異な感じを抱かせたのは、クラッシシズムの詩のジャンルとされていたオードの復活の提唱である。彼は「日常的事件の上に、俗衆のひくい言葉の上にそそり立っているのは、オードだけである。テーマの点でよりひくい他の種類の抒情詩はそれに応じて価値もすくない。ヴォルテールは退屈なものでなければどんな種類の作品でもよいと云ったが、彼はどんなものでも同じようによろしいと云ったのではない」<sup>5)</sup> と云って、オードを詩のジャンルの最上位においている。このオードにたいする高い評価とオード復興のアピールは彼の場合、実践をもともなっている。《グリボエードフに与

1) АНС, «История русской литературы», т. VI, 1953 г., стр. 131.

2) «Литературное наследство», кн. 16-18, 1934 г., стр. 136.

3) Там же.

4) «Мнемозина», II часть.

5) Там же.

う》、《A. П. エルモーロフに与う》、《バイロンの死》等の、内容的にはロマンティズムの反逆精神を謳歌した、いわゆる市民的オード гражданская ода がそれである。このオードの創造に際して、彼はデルジャーヴィンに助けをもとめている。《バイロンの詩》にこの18世紀の詩人の影響の跡がみとめられるとは、すでに B. Г. バザーノフの指摘しているところである。<sup>1)</sup> そして、前にも触れた、キューヘリベッケルのデルジャーヴィンにたいする崇敬もこのような実践とつながりがあると考えられ、また彼のわかい時からの高い文体とアルハイズムへの志向を層一層強めたのも、このデルジャーヴィンであり、創作的実践であったと考えることができる。

それはともかくとして、前記の論文の中心点をなしているのは、何と云っても文学の独自性の問題であろう。キューヘリベッケルも、他のデカブリストの評論家（A. ベストゥージェフ、ルイレーエフら）の例に洩れず、外国文学の見本にたいする無批判的な模倣をロシアの詩人のもっとも重い罪と見なしていた。そして、ジッコーフスキーやバーテュシコフの最大の欠点は彼らの模倣性にあると見て、彼らを擬似浪漫主義者と名づけていた。この点に、前にも指摘した、「ロマンティズム」と「民族性」を同義語と見なす、例のアルハイスト特有の見方が現われているものと考えられる。そして、彼は最後を、「ついにはわが国の作家たち（その中で特に幾人かのわかい作家は真の才能にめぐまれているが）に恥ずべきドイツの鎖をふりきってロシア的な作家たんとすることを期待するものである——ここで特に考慮にいれているのは、A. プーシキンのことである。彼の叙事詩、とりわけ最初のそれは大きな希望をあたえている」という言葉でむすんでいる。

この論文におけるキューヘリベッケルの主張は、ジッコーフスキーがロシア詩にあたえた傾向にたいする攻撃と云い、シラーやバイロンやホラーチウスにたいして下したひどい評価と云い、オードの復興の提唱と云い、ロマンティズムの解釈と云い、すべて、当時の文壇人の目から見て、大胆且新奇な所見でないものはなかった。それだけに、彼にたいする風あたりも強く、反対の声は各方面から上った。オードの復興にたいしてはまずプーシキンが否定的態度をしめして、こう書いている。「エレジーについては云わずもがな、オードもまた叙事詩のひどい段階にあるものである。オードよりもますます多くの創作を要求しているのは、悲劇や喜劇や諷刺詩である……想像力は自然の天才的な認識力である……オードは真に偉大なものの創造に必要な欠くべからざる絶えざる努力を省かせる。」この点にかんしては、プーシキンの方が慧眼であったことは、歴史がそれをしめしている以上、ここに改めてことわるまでもあるまい。

このほかに、ヴォエイコフが《文学ニュース》誌上でキューヘリベッケルに攻撃を加えてきたのにたいして、П. Л. ヤーコヴレフが《善意者》誌上でよわよわしい反論をこころみたこともあったし、またウシャコフが《文学新聞》に評論をのせて、キューヘリベッケルの所論に反駁をこころみたこともあった。が、それらの間に伍してもっとも人目をひいたのは、キューヘリベッケルとブルガーリンとの論争である。もっとも、論争とは云っても、ブルガーリンの批評は初めのうち論調がおだやかであったばかりでなく、筆者にたいしてかなり好意的でさえあった。彼は1824年の《文学新聞 Лит. листы》の第5号と第

1) В. Г. Базанов, «Поэты-декабристы», 1950. стр. 112-113.

15号に批評を書いて、キューヘリベッケルの所見を批判したのであるが、その時彼が反駁したのは大体、キューヘリベッケルが「わが国の詩人はみな抒情詩人たるべきであり民族の誉れのみを歌うべきである」としている点と、キューヘリベッケルが一流の詩人を誹謗して彼らを二流の詩人乃至は模倣者の位置におとし、シラー、ホラーチウス、バイロンらをけなしている点の2点にたいしてである。ところが、これにたいしてキューヘリベッケルは生半可な応酬では満足できず、本格的な論争に発展させようとして、「ムネモジナ」の第三篇に《Ф. В. Бургаринとの会話》という攻撃的な論文を発表した。これは、ブルガーリンが好んで用いた批評的フェリエトンをもじった戯曲的対話の形式で書いたものである。そして、その中で彼はさきの論文で設定した幾つかの命題をさらに一層発展させ深化したのであった。キューヘリベッケルは彼が文学のすべての範疇の中で抒情詩だけを尊重しているというブルガーリンの非難にたいしては、「わたくしはエピック的文学や戯曲文学よりもオードをよしとし抒情詩的文学一般をよしとすることなど、決して念頭に浮べたことはありません」と答え、「わたくしはただ、エレジーやポスラーニエがロシアの詩壇からオードを完全に駆逐してしまったことを悲しんでいるだけです。わたくしはオードがエレジーやポスラーニエよりもたかい文学であるとしているにすぎません」と云って、自分にはエレジーやポスラーニエを完全に絶滅させたいという考は毛頭ないという点を強調している。また、ブルガーリンが、バイロンの肩を持って反駁してきたことにたいしては、彼は自説を固執して、つぎのような補足的な説明を加えている。「そうです、バイロンは一面的です。この一面性を立証することは、さほど困難ではありません……バイロンの《邪宗徒》や《海賊》や《マンフレッド》や《チャイルド・ハロルド》は、自分が居あわすことによって生命をうばい、憐愍の情をも悲哀の情をも殺してしまう同一のおそろしい人物のくり返しです……地獄であれ、天国であれ、天であれ、地であれ、すべてを知っているシェクスピア、ホメーロスと等しくあらゆる世紀、あらゆる民族の中にひとりそびえ立ち、ホメーロス同様、情景、感情、思想および知識の宇宙であり、汲みつくせぬほどふかく、無限に多様であるシェクスピアとは同日の談ではありません」<sup>1)</sup>

1) P. В. Ивьянов-Лазумникは、バイロンをシェクスピアよりひくく見るこのキューヘリベッケルの見方を、1825年のプーシキンのフランス語で書いた手紙の中の思想と関係づけている。それには、「シェクスピアは何という人間だろう、ただおどろくばかりだ。悲劇作家としてのバイロンなぞ、彼の前へ出たら、実に下らない存在だ！バイロンはただひとつの性格しか描いていない、それは彼自身だ」とある。(См. «История русской литературы XIX века», под ред. Овсяннико-Куликовского, т. 1, 1910 г., стр. 258).

キューヘリベッケルはシラーについても、「未熟な」という形容詞で規定した以外に、つぎのような詳細な性格づけもおこなっている。「シラーの抒情詩を支配しているのは、ただひとつの思想、もしくはむしろただひとつの感情とも云うべきものであり、——実体的な世界、地上的な世界にたいする精神的(観念的)な世界の優先である。その感情はうたがいもなく高尚であり、真に抒情的である。だが、文学とはそれらだけに限られるべきものであろうか?」

更に、ベリンスキーの《文学的空想》の中のつぎのような思想も、直接的な影響関係は別として、これらのキューヘリベッケルのバイロンやシラーにたいする見方と無関係だったとは考えられない。「詩人の才能が高ければ高いほど、詩人はふかく且ひろく自然をとらえ、成功裡に自然をそのより高い関係と生活の中に呈示してくれるものである。もしバイロンが恐怖と苦悩を混ぜあわせたとすれば、またもし彼が心の苦しみのみを、魂の地獄のみを理解し表現したとすれば、それは、彼が宇宙の生活の一面だけを理解し、その一頁だけを表現し、われわれに呈示したことを意味する。シラーは自分で天

その後この論争はやがてキューヘリベッケルとブルガーリンとの個人間の論争から、次第に雑誌間の論争へと発展してゆく。すなわち、V. オドエーフスキーが《ムネモジナ》に《Ф. В.ブルガーリンとの会話への付足し Прибавление к разговору с Ф. В.Булгариным》という攻撃的な論文をのせるに及んで、論争は《ムネモジナ》対《文学新聞》間に白熱化し、ブルガーリンの雑誌はキューヘリベッケル、とくにオドエーフスキーにたいしていちじるしく攻撃的な姿勢をしめすにいたったのである。

\* \* \*

以上が 1825 年までのロシア文芸批評の概観である。この時期、とくに最後の 3 年間は、如上の説明によっても明らかなように、ロマンティズムの上昇期にあたり、前記のジュコーフスキーによって代表されるセンチメンタル・ロマンティズムと明瞭に区別されるデカブリズムのロマンティズムがもっとも華やかな開花を見せた時期である。そして、それはまた、デカブリストの蜂起鎮圧後の、ポレヴォイによって代表されるロマンティズムの時期とも趣を異にしている。ここで扱った時期のロマンティズムの評論の際立った特色は、「民族性」の問題と「ロシア独自の文学の確立」の問題が他の時期におけるよりも、また他の国のロマンティズムの評論におけるよりも、大きくあつかわれているという点にあると云える。それはひとつには、ロシア文学があたかも独自の文学として形成さるべき時期にあたっていたことにもよるが、それと同時にデカブリズムの「ショーヴィニズム」と「進歩性」との奇妙な混淆という特殊性と関係づけて考えられねばならぬ事柄であるとも云えるだろう。(未完)

---

の秘密を解したがゆえに、それをわれわれに伝え、われわれに自己のひそかな想いと夢のみをうたった。彼においては、人生の悪は非現実的であるか、さもなければ誇張によって歪められている。この点では、シラーはパイロンにひとしい。しかるに、シェクスピアは、神的な、偉大な、及びがたいシェクスピアは、天国も、地獄も、天も理解していた。自然の王である彼は善からも悪からもひとしい贈物をうけ、おのれの靈感的で正確な洞察力によって宇宙の脈搏を探知した。彼はシラーのように好きな思想、好きな主人公をもたない。

これはベリンスキーの 1834 年の言葉である。グリボエードフの啓発によるとは云いながら、既にこの頃にキューヘリベッケルが 10 年後のベリンスキーとおなじ見解をもっていたということには驚きを禁じ得ない。